キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

キリストへの道

エレン・Ｇ・ホワイト著

福　音　社

STEPS TO CHRIST

ELLEN G. WHITE

Japan Publishing House

Yokohama, Japan

神　の　愛

自然と啓示は、神の愛をあかししています。天の父なる神は、生命と知恵と喜びの源であります。自然の妙(たえ)に美しいものを見てごらんなさい。また自然が、人間ばかりでなく、あらゆる生物の必要と幸福を驚くばかり満たしていることを考えてごらんなさい。輝かしい日の光、地をうるおす雨、また山、丘、海、平原それらはみな神の愛を物語っています。このようにすべての造られたものの必要をお満たしになるのは神であります。詩篇の記者は、美しい言葉をもって次のように歌っています。

「よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。
あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。
あなたはみ手を開いて、
すべての生けるものの願いを飽(あ)かせられます」と。
(詩篇　１４５：１５，１６)

神は　初め、人を全く清く幸福なものにお造りになりました。そして、この美しい地球が創造主のみ手に造られた時には、一点の衰えのきざしものろいの影もありませんでした。愛のおきてである神のおきてを人が犯したために、死と悩みが生じたのであります。けれども罪の結果起った苦しみの中にさえ、神の愛はあらわされています。聖書にも、神は人のために土をのろいたもうたとしるされています。(創世記　３：１７)いばらとあざみ、つまり、いろいろの困難や試みがこの世の生涯を心配苦労の多いものにしていますが、これは人のためであって、罪のもたらした破滅と堕落から救い出すためには、ぜひなくてはならぬ訓練として神がお定めになったのであります。世界は堕落したとはいえ、悲惨なことばかりではありません。自然そのものに希望と慰めのおとずれを読むことができます。その証拠にあざみにも花が咲き、いばらも花でおおわれているのであります。

神　の　愛

神は愛であるということが、どのつぼみにも、またどの草にもしるされています。かわいい小鳥は楽しい歌声で空気を震わせ、美しい色の花はよいかおりをあたりに漂わせ、森の大木は青々と茂り、それぞれにみな神は優しいお父さまのように私どもを守りたもうこと、私どもの幸福を望んでおいでになることを示しています。

神のみ言葉は神のご性質をあらわしています。神御自ら、ご自身の限りない愛とあわれみについてお語りになりました。モーセが「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と言った時に、神はそれに答えて、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」(出エジプト　３３：１８．１９)と仰せになりました。これが神の栄えであります。神はモーセの前を過ぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」(出エジプト　３４：６．７)「怒ることおそく、いつくしみ豊かで(ヨナ　４：２)「いつくしみを喜ばれる」(ミカ　７：１８)ものであると仰せになりました。

神は天にも地にも、数えきれぬほどの愛のしるしをまき散らして、私どもの心をご自分に結びつけたまいました。自然界のいろいろのもの、または人の心が感じることのできる深い優しい地上の絆によって、神は私どもに神ご自身を示そうとなさいました。しかし、これらは神の愛のただ一部を示すにすぎません。このような証拠が与えられているにもかかわらず、善の敵である悪魔は人の心をくらまし、神を恐ろしいもののように見せかけ、残酷で人を決してゆるさない者、きびしい裁判官か強欲な金貸しのように、厳として動かぬ者のように思わせています。また創造主をつねに人類のあやまちを拾い上げて厳罰に処している者のように思わせています。イエスが人類の間に住みたもうたのは、この暗いかげを取り除いて神の限りない愛を示すためでありました。

神のみ子が天より来たりたもうたのは、天の父をあらわすためでありました。「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」(ヨハネ　１：１８)。

神　の　愛

「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ　１１：２７)。弟子の１人が「わたしたちに父を示してくださいとイエスに願った時、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか」(ヨハネ　１４：８，９)と仰せになりました。

イエスはこの地上でのご自分のみわざについて次のように説明なさいました。すなわち「主のみたまがわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ　４：１８)たもうと。これがイエスの使命でありました。かれはあまねくめぐりて良きことをなし、悪魔に苦しめられている者をおいやしになりました。こうしてあらゆる病気を癒しながら、村々をお通りになりましたので、村中誰１人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわされたことのしるしでありました。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのであります。イエスが人となりたもうたのも、人間の必要に応ずることができるためでありました。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、恐れなくイエスに近づくことができました。また幼い子供でさえかれにひきつけられ、そのひざによじのぼって愛にあふれた物静かなみ顔に見入るのでありました。

イエスは真実をなんの遠慮もなく語りたまいましたが、そういう時にはいつも愛をもってお語りになりました。また人と交際するにあたっては、いかにも上手に、深い思いやりと細かい注意を払い、荒々しい言葉を用いたり、なんの理由もないのに言葉を鋭くしたり、感じやすい心をなんの必要もないのに傷つけたり、人の弱さを責めたりなさいませんでした。つねに愛をもって真実をお語りになりました。また偽善、不信、不義をお責めになりましたが、そうした鋭い譴責の言葉をお語りになった時にも、そのみ声は涙にふるえていました。

道であり真理であり生命である自分を拒んだ愛する町エルサレムのことを考えて主イエスはお泣きになりました。人々はイエスを拒んだのでありますが、イエスは優しくかれらをあわれみたもうたのであります。かれは一生の間、おのれを全く捨てて人のためにお尽しになりました。イエスの目にはどの魂もみな尊く映ったのであります。かれは神の子の威厳をお備えになっていましたが、へりくだって、神の家族の１人１人をやさしく思いやり、どの人を見ても、この罪に落ちた魂を救うことこそ自分の使命であるとお思いになったのであります。

キリストの生涯はこうした性質のものでありましたが、これこそ神のご性質であります。キリストのうちにあらわされ、人類の上にあふれ出た天からの愛の流れは、天の父のみ心から出たものであります。優しい思いやり深い救い主イエスは「肉において現れ」(Ｉテモテ　３：１６)た神でありました。

キリストが地上に生活し、苦しみ、十字架上で死にたもうたのは私どもを贖うためでありました。かれは私どもが永遠の喜びにあずかることができるように、「悲しみの人」とおなりになりました。神は、恵みと真理に満ちたもうひとり子を、栄光に輝くみ国より罪にそこなわれ死とのろいに暗く閉ざされたこの世にくだされたのであります。神は、イエスが愛のふところを離れ、天使たちの賛美の声をあとにして、苦しみと恥、無礼、屈辱、憎しみ、はては死をさえ受けることをおゆるしになりました。「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ　５３：５)。荒野の、ゲッセマネの園の、または十字架上のイエスをごらんなさい。１点の汚点もない神のみ子が、罪の重荷を負い、また神と共にいたもうた方が罪の結果である神と人との間の恐ろしい離別を経験したもうたのであります。そして「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ　２７：４６)という苦しい叫びがそのくちびるをついて出たのであります。罪の重荷、罪の恐ろしさ、神から遮断されることなどが神の子の心を砕いたのでありました。

しかし、この大きな犠牲が払われたために、天の神のみ心に人に対する愛の気持をおこさせたのでもなければ、救いたいとの考えを生じさせたのでもありません。いいえ、そうではなく「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛し」(ヨハネ　３：１６)たもうたのであります。神は、その大きななだめのそなえもののゆえに、私どもを愛したもうたのではなく、私どもを愛するゆえに、なだめのそなえものを与えたもうたのであります。キリストは罪に落ちた世界に神の限りない愛を注ぎたもう仲介者でありました。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」(Ⅱコリント　５：１９)とあります。神はみ子と共にお苦しみになりました。ゲッセマネの苦しみ、カルバリーの死を通し、限りない愛をもちたもう神は私どもの贖いの価をお払いになったのであります。

イエスは「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである」(ヨハネ１０：１７)と仰せになりました。これはつまり、こういう意味であります。

「私の父は、あなた方をこの上なく愛しておられますから、私があなたがたの救いのために命を捨てたため、以前にもまして私を愛してくださいます。あなた方の負債と罪を負って生命を捨て、あなた方の身代り、保証人となったため、私は父にいっそう愛せられるようになったのです。なぜならば、私の犠牲によって神は義であることができると同時に、私を信ずる者をも義としたもうことができるからです」

神の子の他には誰も私どもの贖いを全うすることはできません。というのは神のふところにいた者でなければ神をあらわすことはできないからであります。神の愛の高さ、深さを知る者だけがそれをあらわすことができるのであります。堕落した人類のためにキリストが払いたもうた限りない犠牲ほど、失われた人類に対する神の愛をあらわすことのできるものはありません。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」。神はキリストを、ただ人々の間に生活し、人々の罪を負い、かれらの犠牲となって死にたもうためにお与えになったばかりでなく、神はキリストそのものを堕落した人類にお与えになったのであります。キリストは人類の利害、また必要を人々と共に味わいたまいました。

神　の　愛

神と １ つであったキリストは、人々と切っても切れない絆で結ばれ「彼らを兄弟と呼ぶことを恥」(ヘブル　２：１１)としたまいません。かれは私どもの犠牲、また助け主、私どもの兄弟であります。神のみくらの前に人間の姿をもって立ち、永遠に御自ら贖いたもうた人類の１人とおなりになった「人の子」であります。これはみな罪の淵より、また滅びより人が引き上げられ、神の愛を反映し、清き者となる喜びにあずかるためでありました。

私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。霊感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」(Ｉヨハネ３：１)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう。罪を犯して人の子らは悪魔の奴隷となりましたが、キリストの贖いの犠牲を信ずることによって、アダムの子らはまた神の子となることができるのであります。キリストは人の性情をおとりになって人類を引き上げて下さいました。罪に落ちた人類は、キリストにつながってはじめて「神の子」という、その名にふさわしい尊い者となれるのであります。

このような愛に比べ得るものはなにもありません。天の王子となるというのであります。なんと尊いみ約束でしょう。これは深い瞑想に価する主題であります。神を愛さなかった人類へのたぐいもない神の愛であります。この愛を考える時心はへりくだり、神のみ旨のままに従うようになります。そして十字架の光に照されて神のご性質を学べば学ぶほど神の恵みとあわれみを知り、神の公平と正義とゆるしとが１つになっていて、放蕩息子を思いやる母親にも勝る限りない優しい愛の数知れない証拠を認めることができるのであります。

キリストの必要

初め、人は優れた能力と調和の取れた精神を与えられていました。彼はまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、清い目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心と変わってしまいました。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして悪魔のとりことなってしまったのでありますから、もし、神が特別に救って下さらなかったならば、いつまでもそのままの状態でいたことでありましょう。悪魔は、人類を創造したもうた神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思いました。そして、こうした災いはみな神が人類を創造したもうた結果であると言おうとしたのであります。

人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)キリストとの交わりを楽しむことができました。けれども罪を犯して後は、もはや清いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとしました。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのであります。罪人は神のみ前では楽しむことはできません。彼らは、清い者らとの交わりを避けようとします。たとえ天国に入ることが許されても、少しも喜びとはならないでしょう。天国では無我の愛の精神が満ち満ちていて、限りない神の愛をすべての心が反映しているのですが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないことでしょう。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっていることでしょう。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのであります。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとすることでしょう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定めたもうたのではありません。それは、彼ら自らがそうした交わりに不適当なものとなってしまったからであります。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火であります。

罪人は、自分たちを贖うために死にたもうたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのであります。

私どもは、自分の力で１度沈んだ罪の淵から逃れることはできません。また、私どもの悪い心を変えることもできないのであります。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ　１４：４)「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ロマ　８：７)とあります。教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。もちろん、私どもの行動にただ外面的の正しさは与えるかも知れませんが、心を変えることもできなければ、生活の源泉を清めることもできないのであります。天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。キリストの恵みのみが人の力なき魂を生きかえらせて、これを神と清きに導くことができるのであります。救い主も「だれでも新しく生まれなければ」と仰せになりました。すなわち、新しい生涯を送るための新しい心、新しい希望、目的、動機などが与えられなければ、「神の国を見ることはできない」(ヨハネ　３：３)であります。人は生まれながらに持っている良いところをのばせばよいという考えは恐ろしい誤りであります。聖書には、「生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Ｉコリント２：１４)「あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない」(ヨハネ　３：７)とあります。また、キリストについては「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」(ヨハネ　１：４)「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝　４：１２)としるされています。

人はただ、神の愛といつくしみ、また、父親のような優しさを悟っただけでは十分ではありません。また神のおきてにあらわれた知恵と正義とを認め、おきてがいつまでも変わらない愛の原則の上にたてられていることを認めただけでも十分とはいえません。使徒パウロはこのことをよく知って、「もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる」「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ロマ　７：１６，１２)と叫んだのでありますが、なおつけ加えて「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである」(ロマ　７：１４)と言ったのは、言うに言われぬ苦痛と失望があったからであります。彼は純潔と正義とを求めてやみませんでしたが、彼自身にはそこまで達する力はありませんでした。そしてついに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ　７：２４)と叫んだのであります。こうした叫びは、どこにおいても、どんな時代にも、罪の重荷に悩む人々の心から等しくほとばしり出たものであります。こうした人への答は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ　１：２９)というみ言葉よりほかにはありません。

神の聖霊は、罪の重荷から逃れたいと望んでいる魂にいくつも例をあげて、この真理をわかりやすく説明しています。ヤコブはエサウを欺いて罪を犯し、父の家を逃れた時、いい知れぬ罪の重荷でおさえつけられるように感じました。今までの楽しかった生活をあとにして、１人寂しく家を追われていく彼に、何よりもまず気になったのは犯した罪のために神から切り離され、天より全く見捨てられてしまったのではないかということでありました。こうした悲しい心をいだいて、着のみ着のまま土の上に横たわる彼の周囲には、寂しく丘が起伏し空には星が明るくまたたいていました。彼が夢路に入ったかと思うと、不思議な光がまぼろしのうちに目の前に輝き出ました。それは、今自分が眠っている原野から大きな影のようなはしごが天の門まで通じているかのように見え、その上を神の使が上ったり下りたりしていました。

そして輝く栄光のかなたから慰めと希望にみちた神のみ声が聞えてきて、彼の心の求めと望みを満たすのは救い主であることを知らされたのであります。彼は罪人である自分がもう１度神と交わることができる道を示されて、喜びと感謝に満たされました。ヤコブの夢に現われた不思議なはしごは、神と人類の間のただ１人の仲保者イエスを代表したものであります。

キリストがナタナエルと語りたもうた時、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」（ヨハネ　１：５１）と仰せになったのは、これと同じことを指していたのであります。人間は神に背いて自ら神に遠ざかり、ついに地は天より切り離されてしまいました。このだれも渡ることができない深い淵を再びつないで地と天と結びつけて下さったのはキリストであります。キリストは御自らの功績によって罪の結果である深い淵に橋をかけ、奉仕の天使が人との交わりを続けることができるようにして下さいました。キリストは、罪に沈んだ弱い無力な人間を限りない力の源につないで下さるのであります。

人間がいかに進歩を夢み、人類向上のためいかに努力を惜しまないとしても、堕落した人類にとってただ１つの希望である助けの源泉に頼らなければ何の役にもたちません。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は」（ヤコブ　１：１７）神より与えられます。神を離れては真にすぐれた品性をもつことはできません。そして神へのただ１つの道はキリストであります。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ　１４：６）と仰せになりました。

神は、死よりも強い愛をもって、地上の子らに思いをかけておいでになります。神がひとり子をお与えになったということは、全天をそそぎだして、１つの賜物として与えたもうたということなのであります。救い主の生涯、死、その執り成し、天使の奉仕、聖霊の懇願これらいっさいのものを通じて働いておいでになる父なる神と、天の住民たちの絶えざる関心などが、ことごとく人の救いのために力をそえているのであります。

私どものために払われた驚くほどの犠牲を静かに瞑想してみましょう。ひとたび失われたものを呼びかえし、父なる神の家に連れもどすためには、天はあらゆる努力を惜しまないことを感謝いたしましょう。これにまさる動機や力ある方法は、他ではどこにも見いだすことはできません。正しい行為に対する大いなる報酬、天上の喜び、天の使との交わり、神のみ子の愛との交わり、また永遠にわたって私どものあらゆる能力がのばされ、高められていくことなどは、私どもの創造主、あがない主に心から愛の奉仕をさせずにはおかぬ刺激であり、奨励ではないでしょうか。

ところが一方、罪に対する神の審判、必然的な報い、品性の堕落、そして最後の滅亡などがみ言葉にしるされているのは、私どもに悪魔の働きを警告するためであります。

私どもは神のあわれみを無視してもいいでしょうか。神は一体これ以上何をなさることがあるでしょうか。驚くばかりの愛をもって私どもを愛したもうた神との正しい関係に立ち帰りましょう。そして与えられた方法を最もよく用いて神のみかたちに変えられ、もう１度天使と交わることを得て、父なる神とみ子とに一致し、その交わりにはいることができるようにしたいものであります。

悔い改め

人はどのようであったら神の前に正しいと言えるでしょうか。罪人はどうすれば義とされるのでしょうか。私どもはただキリストによってのみ神と一致し、清くなることができます。それではどうすればキリストに行くことができるでしょうか。ペンテコステの日に群衆が罪を悟って、「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と叫んだように、今日、多くの人々は同じ質問をしています。ペテロは、「悔い改めなさい」(使徒行伝　２：３８)と言い、また「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(使徒行伝　３：１９)とも言っています。

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活に本当の変化は起こらないのであります。

悔い改めの意味の本当にわかっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪から来る苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。また、バラムは、自分の行く手に剣をぬいた天使が立ちふさがっているのを見て、命が奪われるのではないかと恐れ、自分の罪を認めたのであります。けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。イスカリオテのユダは主を裏切ったあとで、「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」(マタイ　２７：４)と叫びました。

ユダは、恐るべきさばきと自分の犯した罪のため、自責の念に耐えかねてこういう告白をせずにはいられなかったのでありますが、それは自分の身にふりかかってくる結果を恐れたためで、傷なき神のみ子を裏切り、イスラエルの聖者を拒んだことを深く心の底から悔いたのではありませんでした。

パロも、神の刑罰を受けて苦しんだ時、それ以上の刑罰を逃れるため自分の罪を認めましたが、災いがやむと、また、前のように神にそむいたのであります。これらの人々はみな罪の結果を嘆いたのであって、罪そのものを悲しんだのではありませんでした。

けれども人の心が神の聖霊の感化に服従するならば、良心は呼びさまされ、罪人は神の聖なるおきてのいかに深くまた聖なるものであるかを悟り、これこそ天地を治めておいでになる神の政治の基礎であることを知るようになるのであります。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」(ヨハネ　１：９)とあるその光に心の奥底を照され、また暗きにかくれた事柄を照し出されて、心も魂も自分は罪あるものであるという思いでいっぱいになります。そして正しく、また人の心を探りたもうエホバの神の前に、罪と汚れのまま立つことを恐れます。こうして神の愛、聖潔の美、純潔の喜びを認め、自分も清められて神との交わりに立ち帰りたいと切望するようになるのであります。

ダビデが罪を犯した後に捧げた祈りは、罪に対する悲しみをよくあらわしています。彼は真面目に、心の底から悔い改めたのであります。自分の罪を弁解しようとするのでもなければ、恐ろしい刑罰を逃れようという気持から祈ったのでもありません。ダビデは自分の罪の恐ろしさ魂の汚れを認めて、自分の罪を憎んだのであります。彼が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心が清められることでした。また聖潔の喜びを切望し、もう１度神とやわらぎ神との交わりに入りたいと願ったのであります。彼の心から次のような言葉があふれ出ました。

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」
(詩篇　３２：１，２)

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。・・・・
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。・・・・
ヒソプをもって、わたしを清めてください。
わたしは清くなるでしょう。
わたしを洗ってください、
わたしは雪よりも白くなるでしょう。・・・・
神よ、わたしのために清い心をつくり、
わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。
わたしをみ前から捨てないでください。
あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。
あなたの救いの喜びをわたしに返し、
自由の霊をもって、わたしをささえてください。・・・・
神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」
（詩篇　５１：１－１４）

このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではありません。これは天にお上りになって、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによる他ないのであります。

ところがここで考え違いをして、せっかく、キリストが与えようとしておいでになる助けを受けない人が多いのであります。つまりそれらの人は、まず悔い改めなければキリストに近づけない、悔い改めは罪のゆるしを受ける準備であると思っています。もちろん悔いくずおれた心だけが救い主の必要を感じるのですから、悔い改めが罪のゆるしに先だつのは当然であります。それでは罪人は悔い改めるまではイエスのもとに行かれないのでしょうか。悔い改めが罪人と救い主との間の障害物となってよいものでしょうか。

聖書は「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ　１１：２８)というキリストのご招待は、罪を悔い改めなければ受けることはできないとは教えていません。罪人が真に悔い改めるようになるのは、キリストから出る力によるのであります。ペテロはこの点をはっきり述べて「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救い主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝　５：３１)とイスラエル人に言っています。私どもはキリストなくしてはゆるしが与えられないのと同じように、キリストの霊が良心を呼びさまさなければ悔い改めることができないのであります。

キリストは全ての正しい動機の根源であって、かれのみが人の心のうちに罪を憎む心を植えつけることができるのであります。真理や純潔をしたい、自分の罪深さを認めることなどはみな、キリストの霊が私どもの心に働いている証拠であります。

イエスは「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ　１２：３２)と仰せになりました。キリストは世の罪のために死にたもうた救い主として罪人の前に示されなければなりません。カルバリーの十字架にかけられた神の小羊を眺める時はじめて、説明することのできない贖罪の神秘が私どもの心にも理解され、神の恵み深きことが私どもを悔い改めへと導くのであります。キリストは罪人のために死にたもうて、はかり知れぬ大きな愛をあらわしたまいました。罪人がこの愛を知るとき、深い感銘を受けて心はやわらげられ、悔い改めへと導かれるのであります。

もちろん、人は自分がキリストに導かれていることを意識する前に、罪深い行為を恥じて悪い習慣をやめることがあります。けれども、人が正しいことをしたいと切望して改めようと努力する時はいつでも、キリストの力が働いて彼らを引きつけているのです。自分たちは意識してはいないけれども、その力が心のうちに働いて良心を呼びさまし、行為が改められるのであります。

やがてキリストに導かれて十字架を見せられ、自分たちの罪がかれを刺し通したことを知る時、おきてのなんたるかが良心にはっきりと焼きつけられ、悪にみちた生活や心の底深くに根ざした罪が示されます。彼らはキリストの義とはなんであるかを幾分たりとも了解するようになり、「ああ、なんと罪は恐ろしいものであろう。罪のとりこになった者を救うためにはこのような大きな犠牲が払われなければならなかったのか、私どもが滅びず、永遠の生命を受けるためにはこのような大きな愛、恐ろしい苦しみ、また、はずかしめが必要であったのか」と叫ばないではいられなくなります。

罪人はこの愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられるのであります。そして救いの計画を知るようになると、自分の罪が神の愛するみ子をこのように苦しめたことを悔いて、十字架のもとにひざまずくのであります。

自然界にも働いているこの同じ神のみ心は、人の心に呼びかけ、人が持ち合わせていない何ものかに対する表現しがたい渇望を起させるのであります。この世のものではどうしても彼らの渇望を満たすことはできません。神のみたまは心に真の平安を与えうる唯一のものであるキリストの恵みと、清めの喜びを求めるように訴えています。私どもの救い主は、絶えず見える見えないにかかわらず、さまざまの力を用いて、満足のない罪の快楽を離れキリストによって与えられる限りない祝福を求めるよう、私どもの心に働いておいでになります。この世の渇ききった泉のほとりで飲もうとしても飲むことのできない人々に、み言葉は、「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録　２２：１７)と呼びかけています。

あなた方のうちで、この世の与えるものよりもさらに良いものを心の中で求めておられる方は、その心の願いが魂へ呼びかける神のみ声であることにお気づきになるでしょう。どうか、そのときは神が悔い改めを与えたもうように、そして限りない愛にあふれ全く純潔そのものの姿のキリストを示したもうように祈っていただきたいのです。

救い主は、神のおきての原則、すなわち神と人とを愛するということを、その生涯において完全に実行したもうたのであります。また慈悲と無我の愛が救い主のいのちでありました。ですから私どもが救い主をながめ、救い主の光に照されるとき、はじめて自らの心の罪深さが見えてくるのであります。

私どもも二コデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬぼれふつうの罪人のように、神の前にへりくだる必要がないと考えているかも知れませんが、ひとたびキリストの光が心の中にさしこむとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのであります。また何をするにも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのであります。そして私どもの義は汚れた衣のようであって、キリストの血のみが罪の汚れより清め、かれのみ姿にかたどって、私どもの心を新たにすることを知るのであります。

神の栄光のただ一筋でも、あるいはキリストの純潔のただひとひらめきでも、人の心に照りこむとき、心の汚れの１つ１つが痛々しいまでに、はっきりと見せられ、人の性質の欠点、欠陥があますところなく示されるのであります。それは汚れた欲望、不誠実、汚れたくちびるなどをはっきりと見せるのです。罪人の目には、神の律法を無視した不誠実な行いが、はっきりと見せられ、人の心を探る神のみたまに打たれ苦しめられます。そして、キリストの純潔無垢のご人格をながめて、自分を忌みきらうようになります。

かつて預言者ダニエルは、自分に天使がつかわされた時、その天使の栄光をながめて、自らの弱さと不完全さを感じ、気を失ってしまったのであります。その驚くべき光景にうたれ、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル　１０：８)と申しました。このように、ひとたび、感動をうけた心は、我欲を憎み、利己心を忌みきらい、キリストの義によって神の律法、またイエスの品性に調和した心の純潔を求めるのであります。

パウロは「律法の義については(外部に現われた行為)落ち度のない者である」(ピリピ　３：６)と申しましたが、ひとたび、おきての霊的精神が理解されたとき、自分は罪人であると悟ったのであります。人がおきてを外的生活にあてはめ、おきてを字義的に解釈すれば、彼は罪を犯していなかったと言えるのであります。しかし、その聖なる条文の深い精神を見つめ、神が見たもうように自らを見つめたとき、心へりくだってみ前に伏し、自らの罪を告白したのであります。彼は「わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、わたしは死んだ」(ロマ　７：９，１０)と申しました。ひとたび、おきての霊的精神がわかったとき、罪の醜さがそのまま、ありありと見せられ、自尊心は失せ去ったのであります。

神はどの罪もみな同じであるとは思いたまいません。人間と同じようにやはり大小、軽重の区別をなしたまいます。けれども、人の目にどんなに小さく見える悪事でも、神の前には決して小さい罪というものはありません。人の判断はかたよって不完全なものでありますが、神はすべてをそのあるがままにお量りになります。例えば飲酒家は軽蔑されて、とても天国には行かれないと言われますが、その反面、高慢、我欲、貪欲などは責められず、見過ごしにされがちであります。しかし神は、こうした罪を特に嫌いたもうのであります。というのは、これは神のあわれみ深い品性に反し、堕落しない宇宙に満ちている無我の愛の精神に反するからであります。なにか大きい罪を犯した者は自ら恥じ入り、卑しさを感じ、キリストの恵みの必要を感じますが、高慢な者は何の必要も感じないため、キリストに対して心を閉じてしまい、キリストが来たりたもうて、与えようとなさる無限の祝福を受けることができないのであります。

「神様、罪人のわたしをおゆるしください」(ルカ　１８：１３)と祈ったあわれな取税人は、自らを大悪人であると認めました。また他の人々も同じように、かれをそう見なしていました。しかしかれは、自分の必要を感じ、罪の重荷と恥をいだいたまま神のみ前にいで、あわれみを請うたのでした。彼の心は神のみたまの恵みある働きにより、罪の力から解放されるため開かれていました。

一方高ぶっておのれを義としていたパリサイ人の祈りは、聖霊の働きに対して心を閉じていたことがわかります。彼は神から遠く離れていたので、神の全き神聖さと比べてみて、自分がどれほど汚れているかを感じませんでした。そして彼は必要を感じなかったので、何も受けることができませんでした。

もし、自らの罪深きことに気づいたならば、自分でよくしようなどと思って待ってはなりません。自分はキリストの許に行くにはふさわしくない、と思っている人がなんと多いことでしょう。自分の力で良くなれるとでも思っているのでしょうか。「エチオピヤびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、善を行うことができる」(エレミヤ　１３：２３)とあります。私どもを助けて下さるのは神のみであります。もっと強い確信、もっといい機会、あるいは、もっと清められた性質を持つまでなどと待ってはなりません。私どもは自分の力では何もできないのですから、ありのままでキリストに行くほかはないのであります。

しかし、神は愛と恵みに富みたもうからといって、その恵みを拒む者まで救って下さると思い、自らを欺いてはなりません。罪がいかに恐るべきものであるかは、十字架の光に照されてはじめてわかるのであります。神はあわれみ深いお方なので、罪人をお捨てにはならないと説く者があれば、そういう人はカルバリーの十字架を見るべきであります。というのは、人の救われる方法、つまり人類が汚れた罪の力から逃れ、聖なる者との交わりに立ち帰り、再び霊的生活にあずかる者となるには、キリスト自ら不従順の罪を負い、罪人のかわりにお苦しみになるよりほかに方法がありませんでした。神のみ子の愛と苦難と死はみな罪がいかに恐ろしいものであるかをあかしし、キリストに心を全く任せるよりほかには、その罪の力より逃れることも、向上した生活への希望もないことを明らかにしています。

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを口実にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思う。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快楽を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうなければならないとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。

延ばさないように気をつけましょう。罪を捨てることを延ばし、イエスによって心を清めていただくことを遅らせてはなりません。この点で幾千という人が誤り、永久に滅びてしまいました。私は今なにも人生の短いことや、はかないことを言おうとはいたしませんが、ここに人の気づかない恐ろしい危険があります。それは、神のみたまのささやきに従うことを延ばし罪の生活を続けていくという恐ろしい危険であります。これは実に恐ろしいことです。たとえどんなに小さくても、罪にふけることは、永遠に失われる危険をおかしているのであります。

私どもが打ち勝たないものは、私どもを打ち破り、ついには私どもを滅びにいたらせるのであります。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べるということは、ほんの小さいことであるから、神が宣告したもうたような恐ろしい結果とはなりえないと、自ら思い込んでしまいました。しかしこの小さいことが神の変ることのない清いおきてを犯し、人を神から引き離し、この世に死と、言い尽されぬ災いをもたらしたのであります。それ以来いつの代にも、嘆き、悲しみの声が地より上がり、全ての被造物が人間の不従順の結果うめき苦しんできたのであります。天そのものさえ、人間の神への反逆の結果を感じました。

カルバリーの十字架は、神のおきてを犯した罪を贖うため払わなければならなかった驚くべき犠牲の記念碑として立っています。ですから、罪は小さいものであると考えてはならないのであります。

どんな罪の行為でも、また、キリストの恵みをおろそかにし拒んだりするどんな行為でも、その１つ１つが自分にまたかえってきます。そして心はかたくなになり、意志の力は衰え、理解力は麻痺し、ますます神のみたまの優しいささやきに従わないようになるばかりでなく、従うことができないようになってきます。

けれども、世の中には、悪い行為を変えようと思えばいつでもできる、また、あわれみの招待を軽んじながら、なお、聖霊の声に耳を傾けることはいつでもできると思って、良心の苛責を静めようとしている人々がたくさんいます。彼らは、恵みのみたまを侮り悪魔にくみしていても、いよいよ動くに動かれぬ窮地に陥った時には方向を変えることができると思っています。しかし、それはそうたやすくできるものではありません。一生涯の経験や教育はすっかり人の性格を形づくってしまっているので、その時になって、イエスのみかたちを受けたいと望むものはほとんどないのであります。

たとえそれがどんな小さい悪癖、どんな欲望であっても、いつまでも心の中でもてあそんでいれば、終りには福音のすべての力を無にしてしまいます。魂は罪にふけるごとに、神をきらう心が強くなります。頑固に神を信じようとせず、真理に対して全く冷淡であるという人は、ただ自分のまいた種を収穫しているにすぎません。いにしえの賢人は、罪人は「自分の罪のなわにつながれる」(箴言　５：２２)と申しましたが、悪をもてあそぶことが恐ろしいことをこれほど適切に忠告しているものはありません。

キリストは、いつでも私どもを罪より解放しようとしておいでになります。けれども私どもの意志を強いることは決してなさいません。もし私どもがどこまでも罪を犯し続ける結果、意志は全く悪に傾き、罪より解放されることを望まず、キリストの恵みを受け入れようとしないならば、いったいキリストは何をなさることができましょう。

私どもはかれの愛をどうしても受けようとしないため、自らを滅びに落としいれるのであります。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」(ＩＩコリント　６：２)。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら、‥‥心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル　３：７，８)。

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上　１６：７)。人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまの不純と虚偽が宿っています。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのであります。汚れたそのままの心で神のみもとに行きましょう。詩人がうたったように、全てを見たもう神にすっかり心を開け放して「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇　１３９：２３，２４)と呼ばわりましょう。

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬虔の形だけを受け入れて、心の清められていない人が多くあります。私どもは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇５１：１０)と祈りましょう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければなりません。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題であります。ただ、そうあればよいと望んでいるだけで、それ以上なにもしないならば滅びるよりほかはありません。

祈りと共に神のみ言葉を研究してみるならば、み言葉は神のおきてとキリストの生涯を通して、清めという大原則を教えていることを知り、また、この清めがなくては「主を見ることはできない」(ヘブル　１２：１４)ということがわかってくるのであります。またそれは、罪と救いの道を明らかに示します。私どもは、これを神が魂に語りたもうみ声として、耳を傾けなければなりません。

罪の恐ろしさを知り、自分自身をありのまま見つめるとき絶望してはなりません。キリストは罪人を救うためにおいでになりました。

私どもは、なにも自分で神とやわらぐのではありません ── ああ、なんと驚くべき愛でしょう ── 神はキリストによって、「世をご自分に和解させ」(ＩＩコリント　５：１９)たもうたのであります。神は優しい愛をもって、道に迷った神の子らの心を求めておいでになります。いかなる世の中の親であっても、子供らの失敗やあやまちを神が救おうとしておいでになる人々を忍びたもうほどに忍ぶことは、とうていできません。誰も、これほどの優しさをもって、罪を犯した者に訴えることはできません。また、これほど優しく迷える者を呼び返そうとした者はありません。神のみ約束もご警告もみな、言葉では表わすことのできない愛の息吹きにほかならないのであります。

悪魔がきて、あなたは恐ろしい罪人であると言うならば、あがない主を仰ぎその功績を語りなさい。キリストの光をながめることは大きな助けになります。自分の罪を認めるとともに敵には、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(Ｉテモテ　１：１５)と告げねばなりません。そしてその測り知れぬ愛によって救われることを語りなさい。イエスはシモンに、２人の借財ある者について質問なさいました。１人の負債は少額でありましたが、もう１人は多額の負債を持っていました。しかし主人は２人ともゆるしました。さて、キリストはシモンに、どちらが主人を深く愛したであろうかとお尋ねになりました。シモンはそれに答えて「多くゆるしてもらったほうだと思います」(ルカ７：４３)と申しました。私どもは大いなる罪人でしたが、私どもがゆるされるためにキリストは死にたもうたので、かれの犠牲の功績は私どものかわりに神の前にささげられるに十分でした。最も多くゆるされた者がキリストを一番愛するようになり、そのみくらの最も近くに立って、その大きな愛と限りない犠牲をほめたたえるのであります。神の愛が本当によくわかった時に、罪の深さがわかるのです。私どもを救うために下げられている鎖の長さを知り、キリストが身代りになって払いたもうた限りない犠牲をいくぶんでも悟るとき、心は言い知れぬ感謝にあふれ、悔いくずおれずにはおられないのであります。

告　白

「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言　２８：１３)。

神のあわれみを受ける条件は簡単で、しかも正しく合理的であります。神は、私どもの罪がゆるされるには、なにか面倒なことをしなければならないとは要求なさいません。長途の巡礼の旅に上ったり、痛々しい苦行をしたりして、天の神に自分が良く思われようと思ったり、罪の償いをしようとしなくてもよいのであります。ただ罪を言い表して、これを離れる者はあわれみを受けるのであります。

使徒ヤコブは、「互いに罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」(ヤコブ　５：１６)と言っています。神のほか罪をゆるすことはできませんから、罪は神に告白しなければなりません。そして、過ちは互いに言い表すのであります。もし友人や隣人をつまずかせたならば、自分は悪かったとこれを認めて謝るのであります。そして、これをこころよくゆるすのはその人の義務であります。そうしたあとで神のゆるしを求めなさい。というのはあなたが傷つけた兄弟は神のものですから、彼を傷つけたことは、彼の創造主、またあがない主に罪を犯したことになるからであります。そしてこのことは、まことの仲保者であり、大祭司であるイエスの前に持ち出されます。主は、「わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」(ヘブル　４：１５)たのでありますから、どんな罪の汚点をも清めて下さることができます。

自分の罪を認めて神の前にへりくだらない者は、神に受け入れられる最初の条件さえ果していないわけであります。再び悔いることのない悔い改めをし、本当にへりくだった砕けた心で罪を告白し、自分の罪悪を心から憎んでいるのでなければ、真に罪のゆるしを求めたとはいわれません。

また、罪のゆるしを求めたことがなければ、神よりの平和を見いだすことはできません。私どもが過去の罪のゆるしを味わっていない、ただ１つの理由は、心を卑(ひく)くして真理のみ言葉の条件に従っていないからで、この点について次のようにはっきりと教えられています。罪の告白は、それが公のものであっても、個人的のものであっても、真心からのものであって、十分に言い表されなければなりません。罪人に無理に強いて言わせるものではありません。また、告白は軽率に不注意になされてはなりません。本当に、罪がどんなに忌まわしいものであるかを認めていない人に強いるものでもありません。心の奥底からわき出てきた告白は、限りないあわれみを持ちたもう神へ通じます。詩人ダビデは、「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いくずおれた者を救われる」(詩篇　３４：１８)と言っています。

真の告白は常に、はっきり自分の犯した罪そのものを言い表すのであります。神にだけ告白すべきものもありましょう。または、だれか害をこうむった人々に告白しなければならないものもありましょう。あるいは公のものであれば、公に告白しなければならないこともありましょう。いずれにせよ、告白はすべてはっきりとその要点にふれていて、犯した罪そのものを認めねばなりません。

イスラエルの人々は、サムエルの時代に神より迷い出て、罪の結果に苦しまねばなりませんでした。それは彼らが、神への信仰と、神は知恵と能力をもって国を治めたもうということを見失い、そのうえ、神は、ご自身の働きをあくまで守りたもうということを信じなくなったからであります。彼らは宇宙の大いなる統治者を離れ、周囲の国々と同じような統治者を望んだのであります。しかし平和を得るためには、次のようなはっきりした告白をしなければなりませんでした。「われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(サムエル上１２：１９)と。つまり、悪かったと自覚したその罪が告白されねばならなかったのであります。彼らの忘恩の精神が彼らの魂をおさえ、神より切り離していたのでした。

告　白

真面目な悔い改めと改革が伴わない告白は、神に受け入れられることはできません。はっきりとした変化が生活にあらわれ、神のきらいたもうすべてのものを捨てねばなりません。本当に罪を嘆いた結果はそうなるのであります。私どものなすべきことは、はっきりと示されています。「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ　１：１６，１７)。「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル　３３：１５)と。またパウロは、悔い改めについて「見よ、神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである」(Ⅱコリント７：１１)と言いました。

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもありません。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目でいるわけであります。ですから、その人の告白は真面目でもなければ熱心でもありません。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言います。

アダムとエバは、禁断の木の実を食べた後、言うに言われぬ恐れを強く感じました。最初には、どうして自分たちの罪の言い訳をして、恐ろしい死の宣告を逃れようかと考えました。神が彼らの罪をただしたもうた時、アダムはその罪をなかば神に、なかば自分の同伴者に負わせて「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」と答え、女はその責めをへびに負わせて「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」(創世記　３：１２，１３)と申しました。

告　白

どうしてあなたはへびをお造りになったのですか、どうしてへびをエデンの園にお入れになったのですかという質問がこの罪の言い訳のうちに含まれているのであって、彼らの堕落の責任は神にあると言っているのであります。おのれを義とする精神は、偽りの父である悪魔よりきたもので、アダムの息子、娘はみなこの精神を表わしました。こうした告白は聖霊に動かされたものではありませんから、神に受け入れられることはできません。真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのであります。哀れな取税人のごとく目を天に向けることさえしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶのです。自分の罪を認める者は義とせられます。というのは、イエスは悔い改めた魂のために、おのが血をもって、執り成しをしたもうからであります。

神のみ言葉には、悔い改めと謙遜の実例があげられていますが、そこには罪の言い訳をしたり、自己を正しとするようなことの少しもない、真心からの告白の精神が見られます。パウロは、自分を弁護することなく、自分の罪をその恐ろしいままに描き、罪をいくらかでも軽くしようなどとは考えませんでした。彼は次のように申しています。「多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」(使徒行伝２６：１０，１１)また、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった』‥‥わたしは、その罪人のかしらなのである」(Ⅰテモテ　１：１５)といってはばからなかったのであります。

真に悔い改め、謙遜になった心は神の愛のいくぶんかを悟り、カルバリーの十字架の犠牲を心から感謝してやみません。そして子供が優しい父親に告白するように、本当に悔い改めた者は神の前に自分の罪をみな持ちきたります。み言葉にも「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(Ⅰヨハネ　１：９)と記されているのであります。

献　身

神は、「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会う」(エレミヤ　２９：１３，１４)と約束したまいました。

私どもは全身を捧げて神に従わねばなりません。さもなければ、私どもを神のみかたちに回復する変化は起こらないのであります。私どもは、生まれながら神に遠ざかっています。聖霊は私どもの状態を次のように言っています。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者(エペソ　２：１)「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ　１：５，６)と。私どもは全く「悪魔に捕えられて」(Ⅱテモテ　２：２６)彼の思いのままに、しっかりととりこにされているのであります。神は私どもをいやし、解放しようと望んでおいでになります。けれどもこれには全き改革、つまり私どもの性質を全く新しくしなければなりませんから、私どもはおのれを全く神に捧げなければなりません。

自己との戦いは最も大きな戦いであります。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばなりません。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのであります。

神の政府は盲従を要求し、不合理な統制を行おうとするものであると悪魔は私どもに思わせようとしますが、そうではありません。それは知性と良心に訴えるものであります。「さあ、われわれは互いに論じよう」(イザヤ　１：１８)と、創造主は私ども造られた者を招いておいでになります。神は決して造られた者の意志を強いたりなさいません。真心より、自らよく理解したうえでの服従でなければ、神は受け入れたまいません。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人を１つの機械人形にしてしまいます。創造主はこのようなことを望みたまいません。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになります。

神は私どもの前に最高の祝福をおきたもうて、恵みによって私どもをそこまで導こうとなさいます。また私どものうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめたまいます。罪の絆から放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、私どもの選択いかんにかかっています。

神におのれをささげるには、私どもを神から引き離すものをすべて捨てなければなりません。ですから、「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ　１４：３３)と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な栄誉を神としています。また、なんの責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なかば神に、なかば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないのであります。神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人があります。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたのではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているにすぎません。そのような宗教はなんの役にも立ちません。もしキリストが心に宿るならば、魂はかれの愛と、かれとの交わりより来る大きな喜びに満ちあふれて、キリストに結びつき、かれを熟視しておのれを忘れてしまいます。そしてキリストへの愛が行動の源泉となります。神の強く迫る愛に感激した者は、どのくらい捧げれば神のご要求を満たすことができようかなどと最低の標準を尋ねたりしないで、あがない主のみ心に全く服従したいと望みます。熱心に、希望にあふれて全てを捧げ、彼らが求めている価高きものにふさわしい関心を示します。この深い愛がなくて、キリストを信ずると告白することは単なる話だけであり、無味乾燥な形式、また重苦しい苦役であります。

あなたはキリストに全く服従することは、あまりに大きな犠牲であるとお感じになるでしょうか。「キリストは私に何を与えて下さったか」ということを考えていただきたいのであります。神のみ子は、すべてのものを ── いのちと愛と苦しみとを ── 私どもを贖うためにお与えになりました。こうした大きな愛の対象としてはあまりに無価値な私どもが、自分の心を神に捧げないでいられるでしょうか。私どもは、生涯の一瞬一瞬、キリストの恵みをこうむって生きてきました。私どもは、どのような無知と悲惨のどん底から救われたかを自覚していないのです。私どもは、自分たちの罪が刺し通したキリストをながめながら、かれの愛と犠牲を侮蔑することができるでしょうか。栄光の主の限りなきへりくだりをよく知りながら戦い、そしておのれを卑くくしなければ、いのちに入ることができないと言って、つぶやいてよいものでしょうか。

「悔い改めて心を卑(ひく)くしなければ、神に受け入れられたという保証が得られないのは、どうしたことであろう」と尋ねる高慢な人が多くあります。そういう人はキリストをごらんなさい。かれは罪を犯したまわなかったばかりでなく、天の王子でありましたが人類の身代りとなって罪人となりたまいました。「とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」(イザヤ５３：１２)。私どもが全てを捧げると言っても、いったい何を捧げるのでしょう。それは、イエスに清められ、その血によって洗われ、かれの無比の愛によって救われるために捧げる罪に汚れた心だけであります。それなのに人々は、それを捨てがたいと思っています。私はそういう話を聞き、また書くことさえ恥ずかしいのであります。

神は、私どもが持っていて益になるものは、なにひとつ捨てるようにとは求めたまいません。何をなさるにも、いつもその子らの幸福を考えておいでになります。自分が今求めているよりはるかに良いものを神は備えておいでになるということを、キリストを選んでいない全ての人が悟られるように望みます。人は神のみ心に逆らって考え、行動するとき、自分の心に大きな害を及ぼしています。何が最善であるかを知り、造られたものの幸福のために計画しておいでになる神が禁じたもう道には、本当の喜びを見いだすことはできません。罪の道は悲惨と滅亡の道であります。

献　身

神は子らの苦しむのを見てお喜びになると考えるのは誤りであります。全天が人の幸福に関心をもっているのです。私どもの天の父はだれにも喜びの道を閉じたまいません。しかし苦しみと失望をもたらし、幸福と天国への戸を閉じてしまうようなことにふけってはならないと私どもを戒めたもうています。不完全で弱く、欠点があるそのままの姿で人々を受け入れ、これを罪から清め、その血によって贖いたもうばかりでなく、世の救い主はかれのくびきを負い、その荷をになうすべての者の心の欲求を満たして下さいます。いのちのパンを求める者に、平和と平安をお与えになるのが神のみこころなのであります。また、不従順な者には決して到達できない、この上ない祝福を与える義務だけを私どもが尽すよう神は求めておいでになります。心の真の喜びは、栄えの望みであるキリストを心の中に形づくることであります。

「私はどうすれば神に自らを捧げることができるでしょう」と、尋ねる人が多くあります。そして、自分を神に捧げたいと望んでいながら、道徳的の力が弱く、疑惑の奴隷となり、罪の生活の習慣に支配されています。どんな約束も決心も、砂のなわのように弱く、自分では自分の思想、衝動、愛情を制することはできません。こうして約束を破り、誓いを裏切って自分の誠実さに自信が持てなくなり、神は自分を受け入れて下さらないのではないかと思うようになります。しかし絶望するには及びません。ただ必要なのは本当の意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。全てはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります。私どもは自分の心を変えたり、また自分で愛情を神に捧げることはできません。けれども神に仕えようと選ぶことはできます。意志は神に捧げることができます。そうすれば神は私どものうちにお働きになって、神の喜びたもうように望み、また行うようにして下さいます。こうして性質は全くキリストのみたまに支配されるようになり、キリストが愛情の中心となり、思想もまたかれと一致するようになります。

善と清きを望むのは正しいことでありますが、そこでとどまるならなんの役にも立ちません。クリスチャンになりたいと望みながら、滅びていく人が多いのです。彼らは神に自分の意志を捧げるところまでこないからであります。つまり彼らは、いまクリスチャンになることを選ばないからであります。

意志を正しく働かせるならば生活は全く変ってしまいます。意志をキリストに全く服従させることによって、どんな主義よりも力よりも、はるかにまさった力に自分を結びつけることになるのであります。そして天よりの力を得てしっかりと立つことができ、絶えず神に服従することによって新しい生涯、すなわち信仰の生涯を送ることができるようになるのであります。

信　仰

聖霊によって私どもの良心が目覚めると、罪がいかに忌わしいく、罪の力、罪のとが、また罪からくる災がどんなものであるかが幾分かわかってきて、罪を憎むようになります。罪が自分を神より引き離してしまい、自分は悪の力の奴隷になっていることに気づくのであります。逃れようともがけばもがく程、自分の力なさを感じます。動機は不純で心は不潔で、自分の生活は全く利己心と罪ばかりであることを知り、なんとかしてゆるされ清められて、自由になりたいと望むのであります。神と調和し神に似るにはいったい何をすればよいのでしょうか。

あなたに必要なものは平和です。つまり天のゆるしと平和と愛を心にいただくことであります。それは金で買うことも知識で達することも、また知恵で手に入れることもできません。自分の力では絶対に手に入れることは望めないのであります。けれども神は、これを「金を出さずに、ただで‥‥買い求」（イザヤ　５５：１）むべき賜物として与えたもうのでありますから、ただ手をのばしてそれをつかみさえすれば自分のものとなるのであります。主は、「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ　１：１８）。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け」（エゼキエル　３６：２６）と仰せになります。

あなたは自分の罪を告白して、心よりこれを捨て去り、神に自らを捧げようと決心なさいました。ですから今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえとお願いなさい。そして、神がお約束なさったのですから、そうして下さると信じなさい。これはイエスのご在世の時に教えたもうた教訓であって、神が私どもにお約束になった賜物は得たりと信じるときに、私どものものとなるのであります。人々がかれの力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。イエスはまず、人々を目で見えるものでお助けになって、目に見えないこと、すなわち罪をゆるす力についても、かれに信頼をおくようにお教えになりました。

イエスは中風の病人をいやす時に、このことをはっきりと仰せになりました。「『人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』」（マタイ　９：６）と。同じく伝道者ヨハネも、キリストの奇跡について「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」（ヨハネ　２０：３１）と言っています。

イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにしてかれを信じればよいかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、３８年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せたまいました。この病人は、「主よ、もし私をいやしてくださるならばみ言葉に従います。」とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐに立って歩こうとしました。歩こうとしたときに実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。

罪人である私どもも同じであります。過去の罪を贖うことも、自分の心を変えることも自分自身を清くすることもできません。しかし神は、こうしたことをすべてキリストを通してして下さるとお約束なさいました。あなたはまずそのみ約束を信じ、罪を告白し、自らを神にささげて、神に仕えようと決心しなければなりません。これを実行しさえすれば必ず神はそのみ約束を果たして下さるのであります。神のみ約束を疑わず、ゆるされ、清められたと信じさえすれば、神はそれを事実として下さるのです。中風の病人がいやされたことを信じたとき、キリストが歩く力をお与えになったと同じようにあなたはいやされるのです。信ずるごとくになるのであります。

いやされたと感じるまで待ってはなりません。そして「信じます。いやされています。私がそう感じるからではなく、神がこれを約束したもうたからです」と言いましょう。

イエスは「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ　１１：２４)と仰せになりましたが、このみ約束には条件が１つあります。それは神のみ旨に従って祈るということであります。けれども、私どもの罪を清め、神の子らとして清い生活を送らせようとなさるのは神のみこころであります。ですから、これらの祝福を願い求め、それを受けたと信じて神に感謝してもよいのであります。イエスのもとにきて清められ、恥ずるところなくおきての前に立つことができるのは私どもの特権であります。聖書にも「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない‥‥これは‥‥肉によらず霊によって歩く」(ロ－マ８：１，４)とあります。

ですから、私どもは自分のものではなく、価をもって買われたものであります。「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(Ｉペテロ　１：１８，１９)とあります。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊は私どもの心に新しいいのちを与えたまいます。私どもは神の家族の子供として生れたのです。ですから、神はみ子を愛したもうと同様に私どもを愛してくださるのであります。

さて、あなたは自分をキリストにささげたのですから、退いたり、また自分を取りもどしたりしてはなりません。ただ日ごとに「私はキリストのものです。私は自分をキリストに捧げました」と言って、聖霊を与えられ、かれの恵みによってささえられるよう祈りましょう。おのれを神に捧げ、神を信じるとき神の子となるのですから、そのように神にあって生活しなければなりません。使徒パウロも、「あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６)と申しました。

世には、自分たちは試験されているのであって、心を改めたことを証拠だてなければ、神の祝福をいただくことができないと考えている人々がいます。しかし今すぐにでも祝福を求めて受けることができます。神の恵み、キリストの霊を受けておのが弱きを補うのでなければ悪に抵抗することはできないのであります。イエスは私どもが罪に汚れよるべのないままで、みもとに行くのをお喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどをみな持ったまま悔いの涙をもって、主の足もとにひざまずいてよいのです。主は愛のみ手のうちに私どもをいだき、傷をつつみ、全ての汚れから清めることをご自身のほまれとなしたまいます。

多くの人があやまったのはこの点であって、イエスは個人的に、１人１人にゆるしを与えたもうということを信じないのであります。彼らは神のみ言葉をそのとおり信じません。しかし、だれでも条件に従うならば、いかなる罪のゆるしも価なく与えられることを、はっきり知ることができるのであります。神のみ約束は、自分のためではないなどという疑いは捨てねばなりません。このみ約束は、悔い改める罪人１人１人のためであります。キリストが備えていたもう能力と恵みは、み使によって､信ずる魂１人１人に与えられます｡どんなに罪深いからと言っても、彼らのために死にたもうたイエスから能力と純潔と義とを受けることができないという人はありません。イエスは罪に染んで汚れた衣を脱がせて､義の白い衣を着せようと待っておいでになります｡死ぬることなく、生きよと招いておいでになるのであります。

神は人間がお互いをあしらうように私どもをあしらいたまいません。かれは愛とあわれみといつくしみ豊かな神であります｡「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ　５５：７)。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ　４４：２２)と仰せになっています。

「わたしは何びとの死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。

それゆえ、あなたがたは翻って生きよ」(エゼキエル　１８：３２)。悪魔は、この尊い神よりの保証を奪い去り、人の心から希望と光を消し去ろうとしていますが、そうさせてはなりません。試みる者に耳を貸すことなく、イエスは私が生きるために死んで下さったのです。かれは私を愛し、私の滅びるのを好みたまいません。私にはまた愛にあふれたもう天の父があります。私は天の父の愛をなみし、せっかく与えられた祝福を無駄にしましたが、立って天の父のみもとに行き「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇い人のひとり同様にしてください」と申さねばなりません。このたとえは、さ迷い出た者がいかに迎えられるかを次のように語っています。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいてせっぷんした」（ルカ　１５：１８－２０)。

これは実に優しく、人の心を動かさずにはおかぬ物語ではありますが、これだけでは、まだ天の父の限りないあわれみを十分にあらわしてはいません。主は預言者を通し、「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ　３１：３)と仰せになりました。罪人がまだ父の家から遠く離れた異国で財産を浪費しているとき、父の心はその子の身の上を案じておいでになります。そして神へ帰りたいという気持を彼の心に起させるのはみな、聖霊のやさしい訴えの声であって、さ迷いいでた者へ熱心に話しかけ、哀願し、父なる神の愛の心に引きつけようとしていたもうのであります。

聖書には、こうしたみ約束がたくさんありますから、疑う余地はどこにもありません。あわれな罪人が帰りたいと思い、罪を捨てたいと願っているのに、主は彼が罪を悔いて主の足もとに来るのをお拒みになると考えられるでしょうか。決してそのようなことを考えてはなりません。天の父はそのような方であると考えることほど、魂を傷つけるものはありません。神は、罪を憎みたまいますが罪人をお愛しになります。

神がキリストをお与えになったことは、ご自分をお与えになったことでありました。そして望む者はだれでも救われ、栄光のみ国で限りない祝福にあずかることができるようにして下さったのであります。神が私どもに対する愛を表わすためにお用いになった次の言葉ほど､強く優しい、言葉はありません。｢女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない｣(イザヤ　４９：１５)。

疑い、わななく人々よ、目を上げて見ようではありませんか。イエスはなお生きて、私どものために執り成しをしておいでになります。神が愛するひとり子をお与えになったことを感謝するとともに、かれの死が無駄にならないように祈りましょう。聖霊はきょう、あなたを招いていたまいます。全心をささげて、イエスのもとに行きましょう。そうすれば主の祝福を自分のものとすることができるのであります。

み約束を読むとき、そのみ言葉は言い表すことのできない愛とあわれみの表現であるということを覚えましょう。無限の愛の神のみ心は、はかり知れないあわれみをもって罪人をひきつけていたまいます。「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである」(エペソ１：７)。そうです。あなたを助けることができるのは、ただ神のみであることを信じて下さい。神はご自身の真のかたちを人間のうちに回復したいと望んでおいでになります。告白と悔い改めによって神に近づくならば、神はあわれみとゆるしをもって私どもに近づきたもうのであります。

弟子としての証拠

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」（ＩＩコリント　５：１７）

人は、いつどこで悔い改めたか、あるいはどんな段階をふんで改心したかを、はっきりと言うことはできないかも知れませんが、それであるからと言ってその人が悔い改めていないと言うことはできません。キリストはニコデモに、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」（ヨハネ　３：８）と仰せになりました。風は目には見えませんが、風の通った結果は、はっきりと見たり感じたりすることができます。聖霊が人の心に働くのも、ちょうどそのとおりです。人の目には見えませんが、再創造の力が魂に新しい命を与え、神のみかたちに従って新しい人を造るのであります。聖霊の働きは音もなく目にも見えませんが、その結果は明らかなものであります。神のみたまによって心が新たにされるならば、生活がその事実を裏書きします。私どもはどんなにしても自分の心を変えたり、神と調和したりすることはできないのであります。また自己や自分の良い行いに頼ることもできませんが、心のうちに神の恵みを宿しているかどうかは私どもの生活に現れてきます。性格に、習慣に、いっさいの行動に変化が起りますから、過去と現在との間にはっきりと決定的な対照が見られるようになります。人の性格はときどきの善行とか間違いとかでわかるのではなく、日常の言行動作の傾向によって知ることができるのであります。

別にキリストの力によって新たにされないでも、外見だけは正しい行いをする人のあることは事実であります。自分の勢力を張ろうと思ったり、他人から良く思われたいと望んで規律正しい生活をすることもできます。また自尊心が悪と思われることを避けることもありましょう。

あるいは利己主義な人が、情け深い行為をすることもありましょう。では、私どもがどちらの側に立っているかを、どんな方法ではっきり決めることができるでしょうか。

私どもの心を支配しているのは誰でしょうか。私どもは誰のことを考えているでしょうか。また、誰のことを話すのが好きでしょうか。私どもが何よりも愛情をささげ、何よりも最上の努力を傾けようとするのは誰のためでしょうか。もし私どもがキリストのものであれば、かれと１つ心になり、かれのことを思うのが一番楽しいこととなり、私どもの持ち物も、私ども自身も全てかれにささげてしまいます。そして主のみかたちに似、主の霊を呼吸し、主のみ心をなし、全てのことにおいて主を喜ばせたいと願うようになります。

キリスト・イエスにあって新たに造られた者はみたまの実を結びます。つまり「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ ５：２２，２３）を生じるのであります。もはや、彼らは以前の欲望に従って歩まず神のみ子を信じてそのみ足跡にならって歩みそのご品性を反映しながら清くくいましたもうごとくに、自らを清くするのであります。以前には嫌っていたものを今は愛するようになり、かつて愛していたものは嫌うようになります。高慢、不遜な人は、柔和、謙遜になります。軽佻浮薄な人は真面目に控え目になり、酒に酔う者はそれをやめ放蕩者は純潔になります。世的なむなしい習慣や流行を追う気持は無くなり、クリスチャンは「外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない」（Ｉペテロ ３：３，４）飾りを求めるようになります。

ですから、もし改革が起らなければ真に悔い改めたとは言えません。質物を戻し、奪ったものを返し、罪を告白し、神と人とを愛するようになったならば、その人は確かに死より生に移っているのであります。

あやまちあり、罪あるままの姿でキリストに行き、赦罪の恵みを受けるとき、心の中に愛がわき起ります。キリストの課したもうくびきはやさしいのですから全ての重荷は軽くなります。義務は喜びとなり、犠牲は楽しみになります。以前には暗黒に包まれていたように見えた道も、義の太陽に照されて明るくなります。

キリストのうるわしい人格は、かれに従う者のうちに見られるようになります。神のみ旨をなすことがキリストの喜びでありました。神への愛と栄えをあらわそうとする熱情は、救い主の生涯を動かしていた力であります。愛が救い主の行動をすべて美化し、高尚にしたのであります。愛は神から来るものであります。まだ清められていない心はその愛をつくり出すことも、生み出すこともできません。それはただ、イエスが支配したもう人の心にのみ見いだすことができます。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからである」(Ⅰヨハネ４：１９)。神の恵みによって新しくされた心のうちでは愛が行為の原則となります。愛は性格を改変し、衝動を支配し、欲情を制し、また敵意をおさえ、愛情を高尚にします。この愛が心のうちに秘められ、あたりに高貴な感化を及ぼすのであります。

ここに、神の子ら ── とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが２つあります。これは特別に注意しなければならない事であります。まず第１に、前にも述べたように自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとすることであります。自分の行為によっておきてを守り、清くなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのであります。人がキリストなしにすることは全て利己心と罪に汚れています。信仰によるキリストの恵みのみが私どもを清めるのであります。

それとは反対でありますが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくても良いという考えであります。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いは私どもの救いと全然関係がないということであります。

けれども服従ということは、単なる外面だけの服従ではなく、むしろ愛の奉仕を指すのであります。神のおきては神の品性そのものを表現したものであり、愛の原則を具体化したものでありますから、天にあっても地にあっても神の政府の基礎であります。私どもの心が神のみかたちに似て新しくされ、神の愛が心のうちに植えつけられるならば、神のおきては日々の生活に実行されるのではないでしょうか。

愛の原則が心に植えつけられ、私どもの心が創造主である神のみかたちに似て新たにされるとき、はじめて「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」(ヘブル　１０：１６)という新しい契約が成就されるのであります。こうしておきてが心に記されるとき、それはその人の生活を左右するのではないでしょうか。服従すなわち愛よりでた奉仕と忠誠は、弟子であることの真のしるしであります。聖書にも「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Ｉヨハネ　５：３)「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」(Ｉヨハネ　２：４)としるされています。人は服従しなくてもよいというのではありません。信仰――ただ信仰のみが私どもをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのであります。

私どもは服従によって救いを買うのではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのであります。服従は信仰の実なのであります。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現われたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におるものは、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく知ったこともない者である」(Ｉヨハネ　３：５，６)これが本当の試験法であります。もし、私どもがキリストにあり、神の愛が私どもの心に内住するならば、私どもの感情も、思想も、行動も、神の清いおきてに現わされた神のみ心に調和するようになります。「子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行なう者は義人である」(Ｉヨハネ　３：７)。義とは、シナイ山で与えられた十戒に現わされた神の清いおきての標準によって定められるものであります。

キリストを信じれば神に服従する義務はないという、いわゆる信仰は、信仰ではなく、臆測であります。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである(エペソ　２：８)と言われています。けれども「信仰も、それと同様に、行ないを伴わなければ、それだけでは死んだものである」(ヤコブ　２：１７)ともしるされています。

また、イエスご自身も、この地上にきたりたもう前に、「わが神よ、わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇　４０：８)と仰せたまい、再び天にお帰りになる直前には、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」(ヨハネ　１５：１０)と仰せになりました。聖書には、「わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである‥‥『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(Ｉヨハネ　２：３，６)。「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、み足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(Ｉペテロ　２：２１)とあります。

とこしえの命を受ける条件は、私どもの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることであります。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災いと悲惨とが永久に絶えないことでありましょう。

罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。キリストは、この地上で私どもが会わねばならない試練と誘惑のまっただ中で生活し、罪なき生涯をお送りになりました。そして、私どものために死に、今や私どもの罪を取り除いて、おのれの義を与えようとしておいでになります。もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことのないものとして受け入れられるのであります。

これればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます。こうして、信仰と、たえずキリストに自らの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのであります。このようにするかぎり、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って志をたて、行うことができるようにしてくださいます。そのときこそ「わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラテヤ ２：２０)ということができるのであります。ですから、キリストも弟子たちに、「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(マタイ １０：２０)と仰せになりました。こうしてキリストが私どものうちにお働きになるならば、私どもは、キリストと同じ精神を表わし、同じ業――正しい行為、つまり服従をするようになるのであります。

ですから、私ども自身のうちには、なんら誇るところはなく、自己賞揚のなんの根拠もありません。私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。

私どもが信仰について語るとき、信仰には区別があることを心にとめておかねばなりません。つまり、本当の信仰とは全く違った一種の信仰があることであります。神の存在とその力、み言葉の真理であることは、悪魔もその軍勢も心のうちでは否むことのできない事実であります。聖書には「悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ ２：１９)とありますが、これは信仰ではありません。神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心を捧げ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂を清めるのであります。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられます。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのでありますが、信仰によって新たにされた今は、清いいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇１１９：９７)と言うことができます。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ ８：４)私どものうちに全うされるのであります。

世にはキリストのゆるしの愛を知り、本当に神の子になりたいと望んでいながら、自分の性格が不完全で、生活にはあやまちが多いために、いったい自分の心が聖霊によって新たにされたかどうかと疑う人があります。こうした場合に決して失望、落胆してはなりません。私どもは幾たびとなく、欠点やあやまちを悔いて、イエスの足もとに泣き伏すことでしょう。けれども、そのために失望してはなりません。たとえ敵に敗れても、神に捨てられ、拒まれたのではありません。いいえ、キリストは神の右に座して私どものために執り成しをしていたまいます。使徒ヨハネは「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」(Ⅰヨハネ　２：１)と申しました。また「父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２７)というキリストのみ言葉も忘れてはなりません。神は、あなたをおのれに立ち帰らせ、御自らの純潔と聖潔とをあなたのうちに反映しようと望んでおいでになります。ただ神に従いさえすればすでにあなたのうちに良きことを始めたもうた神は、イエス・キリストの日までその働きを続けて下さるのであります。ですから、もっと熱心に祈り、もっと深く信じましょう。自分の力に信頼できなくなったとき、あがない主の力を信じ、私どもを助けてくださる主を賛美しましょう。

イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛も宿りません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストの清い品性をほめたたえます。しかし、もし私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しく優れた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。

自分の無価値なことを悟れば悟るほど、救い主の限りない純潔とうるわしさとがわかってきます。自分の罪深いことを知ってゆるしを与えたもう救い主のもとに走りより、魂の力なさを悟ってキリストに手をのべます、すると、キリストはあらわれ力をそえたもうのであります。必要に迫られ、キリストと神のみ言葉に近づけば近づくほど、私どもはキリストの品性をもっとよく知るようになり、そのみかたちをもっと十分に反映するようになります。

成　長

心が変化して神の子となることを、聖書では生まれると言っています。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえています。悔い改めてキリストを信じ始めたばかりのものも同様に「今生まれたばかりの乳飲み子」(Ⅰペテロ　２：２)として「成長し」(エペソ　４：１５)キリスト・イエスにある全き人にまで成長しなければならないのであります。また、畑にまかれた良い種のように成長して実を結ばねばなりません。イザヤも、かれらは「義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」(イザヤ　６１：３)と言っています。こうして自然界のいろいろの例があげられて、私どもに霊的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっています。

人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできません。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えたもういのちによるのであります。同じように、神から出るいのちによってのみ、霊的生命が人の心のうちに生まれるのであります。人は「新しく生まれ」(英文傍注・「上より生れ」)(ヨハネ　３：３)ないかぎり、いのちを受けることができません。キリストはそのいのちを与えるためにこの世界に下りたもうたのであります。

いのちにおけると同様に、成長においてもそうであります。つぼみから花を開かせ実を結ばせるのは神であります。種が生長し、「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」(マルコ　４：２８)というのは神の力によるのであります。預言者ホセアは、イスラエルについて「彼はゆりのように花さき」「園のように栄え、ぶどうの木のように花さき」(ホセア　１４：５，７)と言っています。またイエスも私どもに「野の花のことを考えてみるがよい」(ルカ　１２：２７)と仰せになりました。

成　長

木や花は自ら思い煩ったり、努力したりして生長するのではなく、神が与えたもうものによって、そのいのちがささえられ、生長するのであります。子供はどんな思いわずらい、またどんなに努力しても、身の丈を延ばすことはできません。私どもも全くこれと同じで、心づかいや自分の努力では霊的に成長はできないのであります。植物も、また子供たちも、周囲のものからいのちをささえるものすなわち、空気、日光、食物を受けて成長します。動物、植物にとって自然の賜物が必要なように、キリストに頼る者にとってはキリストが必要であります。キリストは、彼らの「とこしえ‥‥の光」(イザヤ　６０：１９)「日です、盾です」(詩篇　８４：１１)と記されてあります。また、キリストは「イスラエルに対しては露のように」(ホセア　１４：５)「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく臨むように」(詩篇　７２：６)とあります。かれは、生ける水「神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」(ヨハネ　６：３３)であります。

神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球の回りを取りまいているように、恵みの雰囲気で全世界を包みたまいました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることができるのであります。

ちょうど、花が輝かしい光線の助けを借り、美しく咲こうとして太陽に向かうように、私どもも義の太陽を仰いで天の光に照され、私どもの品性がキリストのかたちに似るまでに成長しなければなりません。

「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。‥‥わたしから離れては、あなたがたは何１つできないからである」(ヨハネ　１５：４，５)とのイエスのみ言葉は、これと同じことを教えています。木の枝が生長して実を結ぶのには、その幹に連なっていなければならないと同様に、清い生涯を送るには、キリストに頼らねばなりません。キリストを離れてはいのちも、誘惑を退ける力も、恵みと聖潔に成長する力もありません。

しかし、かれにおれば栄えるのであります。キリストからいのちを受けるのですから、しぼむこともなければ、実を結ばぬこともなく、川のほとりに植えられた木のように茂ります。

さて、何か自分だけでしなければならないことがあると考えている人がたくさんあります。彼らは、キリストに頼って罪のゆるしを得ていながら、正しい生活を自分の力で送ろうとするのであります。しかしそうした努力はみな失敗に終ります。イエスは「わたしから離れては、あなたは何１つできない」と仰せになります。恵みに成長することも、私どもの喜びも人のために役だつこともみな、キリストと１つになるか否かにかかっています。恵みに成長するのは、毎日、毎時、かれと交わり、かれにあることによります。キリストは、私どもの信仰の導師であると同時に、これを全うしたもう方であります。キリストは、始めであり終りであり、常にいましたもうのであります。ですから私どもの旅路の始めと終りばかりでなくその道すがら１歩１歩、キリストにいていただかねばなりません。ダビデは「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇　１６：８)と申しました。

「いったいどうすれば、キリストにおることができるのでしょうか」と尋ねる方がありますが、それは最初に主を受け入れたと同じようにしたらよいのです。「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい」(コロサイ　２：６）また「わが義人は、信仰によって生きる」(ヘブル　１０：３８)とあります。あなたは、自分を神にささげ、全く神のものとなり、神に仕え、神に従い、キリストをあなたの救い主として受け入れたのです。あなたは自分ではおのれの罪を贖うことも、心を変えることもできませんでした。しかし神におのれを捧げ、神がこれをすべてキリストのゆえになしたもうたと信じたのであります。信仰によってキリストのものとなったのですから、また、信仰によってキリストのうちに成長するのであります。これは、こちらからも与え、また、神からも受けることであります。自分の心も意志も奉仕も全てを神に捧げ、神のご要求にことごとく従わねばなりません。

そして、服従する力を受けるには、あらゆる祝福に満ちあふれたもうキリストを心に宿し、キリストをあなたの力、義、また永遠の助けとして受けなければなりません。

毎朝、神におのれを捧げ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。「主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私の全ての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべを今日もご用のためにお用い下さい。どうか、私と共にいましたもうて、全てのことをあなたにあってなさせて下さい」と。これは毎日のことです。毎朝、その日１日、神に献身して、全ての計画をかれにお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手に委ねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります。

キリストにある生涯は、平和な生涯であります。感情の興奮はないかも知れませんが、いつも変らない平和な信頼をもった生活であります。自分に望みがあるのではなく、キリストに望みがあるのです。自分の弱さはキリストの力に、無知はキリストの知恵に、もろさはキリストの持久力と１つになります。すると私どもは自分をながめて自分のことばかりを考えないで、キリストをながめるようになるのであります。キリストの愛を瞑想し、その性格の美しさ、完全さを心にとめて考えましょう。キリストの自己犠牲、キリストのへりくだり、キリストの純潔と聖潔、またその比類なき愛を魂の瞑想課題といたしましょう。キリストを愛し、キリストにならい全くキリストに頼ってこそ、私どもはキリストのみかたちに変えられるのであります。

イエスは「わたしにつながっていなさい」と仰せたまいました。この言葉は、やすみ、安定、信頼という意味を含んでいます。またイエスは私どもを招いて、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ　１１：２８）と仰せになりました。同じ思想を詩篇記者は「主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め」（詩篇　３７：７）と言っています。またイザヤも、「穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ　３０：１５）と申しました。

この休みは、不活動のうちにあるのではありません。というのは、救い主の休みの約束への招待には、働きへの召しも一緒になっているからであります。「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(マタイ　１１：２９)。キリストにあって真に休息できる心は、最も熱心に活動的にキリストのために働きます。

自己のことを考えていると、心は、力といのちの源であるキリストから離れていきます。そして、悪魔は、人の心を救い主からそらそうと絶えず努力して、キリストとの一致と交わりを妨げようとするのです。世の快楽、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または、自分の欠点や不完全さ、こうしたものの全部、またはそのどれかに私どもの心をひこうと、悪魔は必死になっています。悪魔の策略に迷わされてはなりません。本当に良心的で、神のために生きたいと望んでいる人々にさえ、悪魔は、自己の欠点や弱さのことばかり考えさせ、こうしてキリストより離して、ついには勝利を得ようと願っています。私どもは、自己を中心としてはたして自分は救われるかどうかと心配したり恐れてはなりません。これはみな、私どもの心を力の源である救い主から離してしまいます。魂を全く神に委ねて、神を信頼し、イエスのことを語り、考え、おのれをキリストのうちに消失させてしまわねばなりません。すべての疑惑をすて恐怖を去り、使徒パウロとともに「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテヤ　２：２０）と言いましょう。神を信じて安んじましょう。神は、託されたものを必ず守りたもうのであります。もし神のみ手におのれをお任せするならば、あなたを愛したもう神は、勝ち得てあまりあるほどにして下さいます。

キリストは、人性をおとりになったとき愛の絆で人類をご自身に結びつけたまいました。しかしこの絆は、人間が故意に離れないかぎり、どんな力でも切り離すことのできないもので、悪魔は常にこの絆を断ち切ろうとし、私どもが自分から選んでキリストから離れるように誘惑をもってきます。

そこで私どもは他に主を選ぶというような誘いに陥らないように警戒し努力して祈る必要があります。どちらを選ぶのも常に自由であります。キリストから目を離さないかぎりキリストは私どもを守って下さいます。イエスをながめていれば私どもは安全であって、なにものもイエスのみ手のうちより私どもを奪うことはできません。常にイエスをながめることによって私どもは「主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント　３：１８)ようになるのであります。

初代の弟子たちが、愛する救い主に似るようになったのも、こうした方法によったのであります。弟子たちは、イエスのみ言葉を聞いて、自分たちはイエスを必要としていると感じたので、まず求め、見いだし、ついにイエスに従ったのでありました。彼らは、家の中でも、食卓でも、私室でも、野外でも、いつも主と共にいました。ちょうど先生と生徒が一緒にいるように毎日そのくちびるより清い真理を学びました。また、彼らは、僕が主人につかえて義務を学ぶように、主を仰いだのでした。これらの弟子たちも、「わたしたちと同じ人間」(ヤコブ　５：１７)であって、彼らも罪に対して、私どもと同じように戦わねばなりませんでした。彼らも、清い生活を送るには、同じ恵みを必要としたのであります。

救い主のみかたちを一番よく反映したといわれる愛された使徒ヨハネでさえ、生まれつき美しい性格の持ち主ではありませんでした。彼は差し出がましく名誉心の強い人でした。そればかりでなく血気にはやって、なにか害でも受けるとすぐ怒りちらすたちでありました。けれども、聖なるキリストの性格を見せられたとき、彼は自分の欠点を知り謙遜になりました。神のみ子の日常生活に接して、力強いうちにも忍耐深く、権威があるうちにも優しく犯しがたい尊厳のうちにも謙遜なその姿をながめて、かれの魂は、賞賛と愛で満たされました。日１日と、かれの心はキリストに引きつけられ、ついに主を愛するのあまり、自分を忘れてしまいました。彼の怒りやすい野心満々たる気質も、キリストの感化力に従い、聖霊の更生力が彼の心を新しくしました。

つまり、キリストの愛の力が性格を一変させてしまったのであって、これは、イエスと１つになった確かな証拠であります。キリストが心のうちに住みたもうとき性格全体が変化し、キリストの霊、キリストの愛が心を和らげ、魂を制御し、思想や欲求を神と天に向けるのであります。

キリストの昇天したもうたときも、かれはなお共にいましたもうという感じを弟子たちはもちました。それは愛と光に満ちた個人的の存在でありました。弟子たちと共に歩み、語り、祈り、彼らの心に希望と慰めを与えたもうた救い主イエスは、平和の言葉を語りながら、彼らを離れて天にあげられたまいました。天使の群がイエスをうけた後、弟子たちに聞こえたのは「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ　２８：２０)との救い主のみ言葉でありました。イエスは、人のかたちのまま昇天なさいました。弟子たちはイエスが神のみくらの前にいたもうてもなお自分たちの友であり救い主であり、また思いやり深い点においても変りなく、悩み苦しむ人類と関係を持っていたもうことを知っていました。イエスは、かれの贖いたもうた者のために払った価の記念となった手足の傷を示したもうて、御自らの尊い血の功績を神の前に述べていたもうのであります。弟子たちは、イエスが天に上りたもうたのは所を備えるためであって、再びきたり、自分たちを受け入れたもうのであるということも知っていました。

主の昇天後彼らは集まって、イエスのみ名によって天の父に熱心にねぎごとを捧げていました。厳粛なうやうやしい気持をもって頭をたれ、確証の言葉をくり返しながら祈っていました。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。」(ヨハネ　１６：２３，２４)。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ローマ　８：３４)という確かなあかしをもって、彼らは信仰の手を高く高く延ばしたのであります。

こうしてキリストが、「あなたがたのうちにいる」(ヨハネ　１４：１７)と仰せになった慰むる者なる聖霊が、ペンテコステの時に彼らに与えられたのであります。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハネ　１６：７)と仰せになりましたが、それ以来、キリストは聖霊を通してつねにその子らの心のうちに住みたもうのであります。こうして彼らは、この地上に主がいましたもうときよりいっそう近く主と１つになることができたのであります。内住したもうキリストの光、愛、そして力が弟子たちから輝き出たので、人々は驚き、「不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であること」(使徒行伝　４：１３)を知るようになったのであります。

キリストが最初の弟子たちに対してなしたもうたと同じことを、今日も、その子らになそうと望んでおいでになります。それは、少数の弟子の前で祈りたもうた最後の祈りの中で「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」(ヨハネ　１７：２０)と仰せになったことによってもわかります。

イエスは、私どものためにも祈り、ご自身が天の父と１つであったように、私どもも天の父と１つになれるようにとお願いになりました。これはなんと貴い一致でありましょう。救い主もご自身について「子は‥‥自分からは何事もすることができない」(ヨハネ　５：１９)「父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである」(ヨハネ１４：１０)と仰せになりました。もしキリストが私どもの心のうちに住んで下さるならば、キリストは私どものうちに働いて「その願いを起こさせ、かつ実現に至らせ」(ピリピ　２：１３)たもうのであります。キリストがお働きになったように私どもも働き、その同じ精神をあらわすようになります。こうしてキリストを愛し、キリストのうちにあって、私どもは「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達」(エペソ４：１５)するようになるのであります。

人生と活動

神は、宇宙のいのちであり、光であり、喜びの源であります。ちょうど太陽の光のように、また、泉からわき出る水の流れのように、祝福が神から全ての造られたものに流れ出ます。そして、神のいのちが人の心のうちに宿っていればどこであっても、愛となり、祝福となって他に流れていきます。

私どもの救い主は、堕落した人間を向上させて贖うことを喜びたまいます。であればこそ、かれはご自分のいのちを惜しまず、十字架をしのび恥をもいといたまいませんでした。天の使たちもまた、他の幸福のために働きこれを喜びとしています。利己的な人々は、不運な人々、また卑しい性格の人や下層階級の人々のために働くことは恥であると思っていますが、そのような仕事を罪のない天使たちがしているのであります。天に満ちあふれているのは、キリストの自己犠牲的愛の精神であります。これこそ、天国の幸福の本質ともいうべきものであって、キリストに従う者が持たねばならぬ精神であり、なさねばならぬ働きであります。

キリストの愛が心のうちに宿るとき、それはちょうど、かぐわしいかおりのように隠すことはできません。その清い感化は、この人に接する全ての人に感じられます。心のうちにキリストの精神が宿っていれば、それは砂漠の泉のように流れ出て全てをうるおし、今にも死にそうな人にいのちの水を飲ませます。

イエスを愛するならば、人類の祝福と向上のために、イエスが働きたもうたように働きたいと望むようになります。そして、天の父の保護のもとにある全ての造られたものをやさしく愛し、同情するようになります。

救い主の地上における生涯は、安楽な自己中心の生活ではありませんでした。かれは、たゆまず熱心に失われた人類の救いのために労したまいました。馬槽からカルバリーに至るまで、かれは自己犠牲の道をたどり、至難なわざ困難な旅路など、いかなる労苦をも避けようとはなさいませんでした。

かれは「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためでありまた多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」(マタイ２０：２８)と仰せになりました。これがその生涯の大きな御目的で、その外のことは第二義的のもの、付随的のものでありました。神のみ心をなし、神のみわざを成し遂げることは救い主の食物でありました。かれの働きのうちには、私心とか私欲とかは全く見られませんでした。

そのように、キリストの恵みにあずかった人々は、喜んでどんな犠牲をも払いキリストがいのちを与えたもうた他の人々も天の賜物を受けることができるようにいたします。彼らはできるかぎりを尽して、この世を少しでも住み良い世の中とします。真に悔い改めた者の心には、必ずこうした精神が見られるようになるのであります。人は、ひとたびキリストに来るやいなや、イエスはいかに尊い友であるかを他の人に知らせたいと望みます。人を救い清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことはできません。私どもがキリストの義の衣をまとい、内住する聖霊の喜びで満たされているならば、黙っていることはできないはずであります。もし、主の恵みを味わい悟ることができたならば、何か言いたくなるものです。ピリポが救い主を見いだしたときのように、他の人々を主のみ前に誘わずにはいられなくなるでしょう。そして、彼らにキリストの美と、見えざる世界の現実性について話したいと思うでありましょう。またイエスがたどりたもうた道を踏みたいと熱心に願い、周囲の人々に「世の罪を除く神の小羊」を仰がせたいと切望するようになるでありましょう。

他人を祝福しようとする努力は、かえって自分自身の祝福となって戻ってきます。神が私どもを贖い、計画の一部に携わらせて下さるのはこのためであります。神は、人に神の性質をもつ特権をお与えになりましたが、これは他の人に祝福を分かつためであります。これは神が人類にお与えになる最高の栄誉であり、最大の喜びであります。こうして愛の働きの共労者となる者は、創造主の最も近くにはべるのであります。

神は、福音宣伝の働き、その他全ての愛の奉仕の働きを天使にお任せになることもできました。また別の方法によって目的を達成なさることもできました。しかし、神は限りない愛をもって、私どもを神、キリスト、天使と共に働く者として選び、おのれを忘れて働くことから来る祝福、喜び、霊的向上に私どもをあずからせて下さったのであります。

私どもは、キリストと苦しみを共にすることによって、キリストと１つになります。他人の幸福のためにする自己犠牲の行為はことごとく、与えるものの心にいよいよ情け深い心を強め、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」（ＩＩコリント　８：９）と記されている世のあがない主にいっそう近く結びつけます。こうして、私どもを創造したもうた神の目的を果す時始めて、生きていることが私どもの祝福となるのであります。

もし、キリストがその弟子たちに望みたもうたように働き、主に魂を導こうとするならば、私どもは神についていっそう深い経験と更に広い知識の必要を感じ、飢えかわくごとくに義を慕うようになります。こうして神に求めるならば、信仰は強められ、魂は救いの泉から思う存分飲むことができます。反対や試練に会えば、かえって聖書に親しみ祈るようになり、ますます恵みとキリストの知識に成長し、豊かな経験に導かれるのであります。

おのれを忘れて他人のために働く精神は、その人の性格に深さと落ち着き、キリストのようなうるわしさを加え平和と幸福をもたらします。彼の抱負は高められ、怠惰とか利己心の余地はなくなります。こうして、クリスチャンの美徳を実行する人は成長し強くなり、神のために働きます。彼らは、はっきりと霊的のことを理解するようになり、動揺することなく、信仰に成長し祈りに力を増してきます。神の霊が人の心にふれて働くと、それに答えて、心は美妙な音を奏でます。このように、他人の益のために我を忘れて働く者は、必ず自分の救いを全うするのであります。

恵みに成長するただ１つの方法は、キリストがお命じになった働きをおのれを忘れてすることであって、助けを必要としている人に、私どもの力の及ぶ限り助けと祝福を与えることであります。力は使えば出てきます。生きるには活動しなければなりません。恵みによって与えられる祝福を受動的に受け、キリストのため何もしないでいながら、クリスチャンのいのちを保とうと努力している人は、働かないでただ食べてばかりいて生きようとしているのと同じであります。自然界と同じように霊界でもこれでは衰えてしまうよりほかありません。手足を使わないでいれば、やがて手足を動かす力を失ってしまいます。それと同様に、神がお与えになった力を使わないクリスチャンは、キリストにまで成長しないばかりでなく、すでに持っていた力さえ失ってしまうのであります。

キリストの教会は、人類の救いのために神がお定めになった機関であって、世界に福音を伝えることがその使命であります。そして、その義務は、クリスチャン１人１人の肩に負わせられていて、だれでもその力、機会に応じて、救い主のご命令を全うしなければなりません。私どもにはキリストの愛があらわされたのでありますから、キリストを知らない全ての人々にそれを知らせる義務があります。神は、私どものためばかりでなく、他の人をも照すため光を与えたもうたのであります。

もし、キリストに従う者がみな、自分の義務にめざめるならば、今日ただ１人いるところに数千の者がいて、異邦の地に福音を宣べ伝えていることでしょう。また、直接、個人的にみわざに従事できない人は、資金によってまたは同情や祈りによって、それを支えることができます。キリスト教国にあっても、もっと熱心な努力があって良いはずであります。

もし家庭内に、キリストのためになすべき働きがあるとすれば、私どもは、異邦の地に行ったり、家庭から離れる必要はありません。家庭内でも、教会内でも、あるいは私どもと交際する人、取引する人々の間においてでも働くことができます。

イエスは、この世の生涯の大部分をナザレの大工小屋で忍耐強くお働きになりました。いのちの主が人から認められもあがめられもせず、農夫や労働者と肩を並べてお歩きになったときにも、奉仕の天使は主に付き添っていました。イエスは、貧しい家業にいそしんでおいでになった時も病人を癒したり、ガリラヤ湖の荒れ狂う波の上をお歩きになった時と同じように、忠実にその使命をお果しになりました。ですから私どもも、この世のどんな卑しい仕事をしていても、また、どんな低い地位にあっても、イエスと共に歩きイエスと共に働くことができます。

使徒は「各自は、その召されたままの状態で、神のみまえにいるべきである」(Ⅰコリント７：２４)と言っています。例えば実業家であれば、誠実に仕事をして主に栄光を帰すことができます。もしその人が真のクリスチャンであるならば、全て自分の信じている宗教にしたがって事をなし、キリストの精神を人にあらわします。また、職人であれば勤勉に忠実に働いて、ガリラヤの丘で卑しい仕事に励みたもうたイエスを代表することができます。キリストのみ名を名のるものは誰でも、他の人がその良い行いを見て、創造主、あがない主なる主をあがめるように導かねばなりません。

他の人の方が、自分よりも優れた才能と機会に恵まれているからという口実をもうけて、自分の賜物をキリストのために用いない人が多くあります。ただ特別な才能を持っている者だけが、神のため才能を捧げて奉仕するよう要求されていると一般に考えられています。また才能は、ただ一部の特別な人々にだけ与えられているのであるから、これ以外の人々は働きをするように召されてもいなければ、報いを共に受けることもないと思っている人があります。しかし、譬には、そのようにあらわされてはいません。この家の主人がしもべたちを呼んで、おのおのに仕事を与えました。

愛の精神をもって、この世のどんな卑しい仕事も「主に対してするように」(コロサイ　３：２３)することができます。神の愛が心のうちにあれば、それは生活にあらわれてきます。キリストのよいかおりが私どもを囲み、私どもの感化は他の人々を高め祝福するのであります。

神のために働くといっても、何か大きい機会を待つ必要はなく非凡な才能などを持たなくても良いのであります。人からどんなに思われるかなどと気にする必要もありません。もし日常の生活が、その信仰の純潔、真実なことをあかしし、人々のため何か益になりたいと望んでいることが他の人々にわかれば、その努力は決して無駄にはならないのであります。

イエスのどんな卑しい貧しい弟子でも、他の人々への祝福となることができます。彼らは自分が特別に善をしているとは少しも気づかないかもしれませんが、知らず知らずの間に与えた感化が祝福の波となり、それがますます広くますます深くなっていきます。しかもその結果は、最後の報いの日まで決してわからないでしょう。何か大きな事をしていると感じることもなく知ることもありませんが、成功するかどうかなど思い煩う必要もありません。ただ静かに前進して、神が摂理のもとに与えたもう仕事を忠実にすれば、その生涯は無駄にはならず、魂はますますキリストに似てきます。彼らはこの世で神と働いて、きたるべきみ国でのより高き働きと変わらざる喜びにあずかるにふさわしい者となるのであります。

神についての知識

神は多くの方法を用いてご自身を私どもに知らせ、私どもを神との交わりに導いていたまいます。自然は絶えず私どもの感覚に話しかけていますから、心を開いているならば、神のみ手のわざにあらわされた神の愛と栄光に強く打たれるのであります。また、耳を傾けて聞くならば、自然界を通して神が語りたもうているのを知ることができます。緑の野、大きな樹木、花やつぼみ、過ぎ行く雲、雨のしずく、ささやく小川、天の栄光などはみな私どもの心にささやいて、これらいっさいを創造したもうた神を知るようにと招いています。

私どもの救い主は、自然界の事物に関係をつけて尊い教訓をお語りになりました。木や鳥、谷間の花、丘や湖、美しい天、それから日常のいろいろの出来事などをみな、真理のみ言葉と結びつけて、人々がどんなに忙しい仕事に追われているときでも、その教訓を思い出すことができるようになさいました。

神は、私どもがみ手のわざを尊重し、また、私どもの地上の住み家を単純に、しかも落ち着いた美しさをもって飾って下さったことを感謝することを望みたまいます。神は美をお愛しになりますが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美をお愛しになります。神は私どもが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを涵養するよう望んでおいでになります。

また、私どもが耳を傾けさえすれば、神の創造のみわざは、従順と信頼の尊い教訓を教えています。広漠たる天空にあっても、昔から定められた軌道を進む星より、いと小さき原子に至るまで、自然界のものはみな創造者のみ旨に従っています。神は、創造したもうた全てのものを守り支えていたまいます。広い宇宙の無数の諸世界を支えたもう神は、同時になんの恐れもなくさえずっている小さなすずめの必要をも顧みたもうのであります。

人が１日の働きに出て行くときも、祈るときも、夜休むときも、朝起きるときも、また、金持が宏壮な邸宅でふるまいをするときも、貧しい人が子供らを集めて粗末な食事をするときも、その１つ１つを天の父はやさしく見守っておいでになります。どんな涙も神の目にとまらぬものはなく、どんなほほえみも見過ごしにされることはありません。

もしも、私どもがこうしたことを信じるならば、よけいな思い煩いはなくなります。そして人生も今のような失望ばかりではなくなります。神はどんなに心配や苦労をおかけしても、それに圧倒されたりはなさいません。ですから、どんなに大きなことも小さなことも、全て神のみ手にお任せすることができるのであります。こうしてはじめて、私どもは多くの人々が、長い間知らなかった心の平安を味わうことができるのであります。

この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれない来るべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいの影は見られません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどの立派なものであることを覚えましょう。神は自然界を美しく飾りたまいますが、それでも、私どもは、神の栄光のほのかな光を見ているにすぎないのであります。聖書には「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(Ｉコリント　２：９)と記されています。

世の詩人や博物学者は、自然について多くのことを歌いあるいは語りますが、真に鑑賞する力をもってこの地上の美を楽しむことができるのはクリスチャンだけであります。なぜならば彼らは天の父のみ手のわざを認め、花や木にあらわれた神の愛を認めるからであります。丘や谷や川や海をながめても、それが人類に対する神の愛のあらわれであるとみなさない人は、その存在の意義を十分に悟ることはできません。

神は、摂理を通し、または心にささやく聖霊の感化を通してお語りになります。私どもの事情や環境、つまり、私どものまわりで毎日起っている変化の中にも、私どもが心を開いて見ようとさえすれば、尊い教訓を得ることができます。

詩篇記者は神の摂理の働きの跡をたどって「地は主のいつくしみで満ちている」（詩篇　３３：５）。「すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、主のいつくしみをさとるようにせよ」（詩篇　１０７：４３）と言っています。

神は、み言葉、聖書をもって私どもに語っておいでになります。み言葉は、神のご品性、神の人類を扱いたもう方法、また贖罪の大業をもっとはっきりした言葉で啓示しています。そして父祖たちや預言者たち、また、昔の聖者たちの歴史が繰り広げられています。彼らは「わたしたちと同じ人間」（ヤコブ　５：１７）であって、私どもと同じように失望と戦い、また、私どもと同じように誘惑に負けましたけれども、再び勇気を出して、神の恵みによって勝ちを得たことを知るとき、私どもも義を追い求めて戦っていかねばならないと励まされるのであります。彼らが与えられた尊い経験を読み、彼らが受けた光と愛と祝福について学び、彼らが与えられた恵みによってなした働きについて読むとき、彼らに霊感を与えた同じ精神が、私どもの心にもそうしたいという励む気持を起させ、彼らの品性に似て、彼らのように神と共に歩みたいと望むようになります。

イエスは、旧約について「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ５：３９）と仰せになりましたが、新約については、なおいっそうそうであるといわねばなりません。私どもの永遠のいのちの希望はあがない主なる主にあります。全く聖書全体がキリストについて語っています。「できたもののうち、１つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ　１：３）という創造の最初の記録より「見よ、わたしはすぐにくる」（黙示録　２２：１２）との最後の約束にいたるまで、私どもはキリストのみわざについて読みキリストのみ声を聞くのであります。もし救い主を知りたいと思えば、聖書の研究をするにまさるものはありません。

神のみ言葉を心に満たしましょう。神のみ言葉こそは渇きを癒す生ける水であります。また、天よりの生けるパンであります。イエスも「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ　６：５３）と仰せになりました。そして、それを御自ら説明して「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ　６：６３）と仰せたもうたのであります。

私どもの体は、私どもが飲み食いする物から成り立っています。霊界においても自然界と同じであって、私どもの考える事柄が私どもの霊性に力と健康を与えるのであります。

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠に渡って贖われた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないでしょうか。イエスの無限のあわれみと愛、また私どものために払われた犠牲は私どもが真面目に考えねばならない問題であります。私どもは愛するあがない主、また仲保者のご品性をよく考え、民を罪から救うためにこの世に来たりたもうたその使命を深く瞑想しなければなりません。こうして天の事柄を考えるとき、私どもの信仰と愛はますます強くなり、私どもの祈りはいよいよ神に受け入れられるものとなります。というのは、もっと信仰と愛とが祈りのうちに織り込まれるようになるからであります。その祈りは理知的な祈りとなり、熱誠なものとなります。そしてイエスをいよいよあつく信じ、日ごとにかれによって神に来る者をすべて全く救いたもうイエスの能力を身をもって経験するようになります。

救い主の完全さを瞑想するとき、私どもも全く変えられて救い主の純潔なみかたちに造りかえられたいと望み、あがめまつる救い主のようになりたいと飢えかわくごとく願うようになります。キリストのことを考えれば考えるほど、キリストのことを他の人に話すようになり、世の人々にキリストを代表する者となります。

聖書は、学者のためだけに書かれたのではありません。むしろ、一般の人のために書かれたものであって、救いに必要な大真理は、真昼のように明らかに記されています。人がこのはっきりとあらわされた神のみ心を捨てて、自分の判断に従ったりしないかぎりは、誰も誤ったり、道を見失ったりすることはありません。

聖書の教えていることについては、人のあかしに頼ったりせずに、自分で神のみ言葉を研究しなければなりません。もし、私どもが当然自分で考えるべきことを他人に任せるようでは、せっかくの精力はそがれ、才能は衰えてしまいます。

尊い脳力も、集中して思考する価値ある問題がないために萎縮し、ついには、神のみ言葉の深い意味を握る力を失ってしまいます。聖句と聖句とを対照して、聖書の問題がどう関連しているかを研究するならば知力は必ず発達します。

聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。もし、神のみ言葉を正しく研究するならば、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的を持つことができますが、今日そうした人は非常にまれであります。

ただ聖書を急いで読んだだけではほとんど益はなく、たとえ聖書全体を通読しても、その美しさを認めることができず、奥深いところに隠れた意味を了解することができないのであります。しかし、わずか１節でも、その意味が心にはっきりするまで研究し、それと救いの計画との関係を明らかにすることは、多くの章を定まった目的もなく、なんらこれといった教訓も得ないで読むよりはるかに価値があります。いつも聖書を持って、機会があるごとに読み暗誦しましょう。例えば道を歩いているときでも、１節でも読んでこれを黙想すると、それが頭に残るものであります。

熱心に祈りと共に学ばなければ、知恵を得ることはできません。聖書にはわかり易く書かれていて、間違う余地がないところもあれば、また、表面に意味があらわれていなくて、１目見ただけでは少しもわからないところもあります。聖句は聖句とよく比較して、注意深く研究し、祈りのうちによく考えねばなりません。そのような研究は豊かに報いられます。鉱夫が地下深く掘り下げて、隠れている尊い鉱脈を発見するように、辛抱強く、神のみ言葉を隠れている宝のごとく捜すならば、不注意な探求者の目にはとまらぬ価値ある真理を発見することができます。そして、心の中で熟考された霊感によるみ言葉は、いのちの泉からわきでる流れのようになるのであります。

聖書は、決して祈りを捧げずに研究してはなりません。ページを開くときは、聖霊の導きを祈らねばなりません。この導きは必ず与えられます。ナタナエルがイエスの許にきたとき、救い主は、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人(びと)である。その心には偽りがない」と賛嘆の叫びをあげたまいました。ナタナエルが「どうしてわたしをご存じなのですか」と尋ねると、イエスは「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ　１：４７，４８)とお答えになりました。私どもも、真理を知ることができるようにと光を求めるならば、イエスは私どもが祈りの密室にあるのを見たまいます。心を卑(ひく)くして神の導きを求める者には、天使が光の世界から送られるのであります。

聖霊は救い主をあがめ、救い主に誉れを帰します。またキリストとその純潔な義をさし示し、キリストによって私どもに与えられる大いなる救いを示すのがその役目であります。イエスは「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１４)と仰せたまいました。真理の霊のみが、神の真理を本当に教えることのできる力ある教師であります。神が人類のためにそのひとり子を与えて死なしめ、また、聖霊を賜うて人の教師となし、絶えざる案内者となしたもうことから見て、どんなに人類を価値あるものとみなしたもうかがわかるのであります。

祈りの特権

神は、自然と啓示、摂理、および聖霊の感化を通して私どもに語りたまいます。しかしそれだけでは十分でありません。私どもも、また、神に心を注ぎ出す必要があります。霊的生命と力を得るためには、私どもの天の父と実際に交わらねばなりません。私どもは、心が神に引かれ、神のみわざ、憐れみ、祝福などを瞑想するでしょうが、これは、十分な意味での神との交わりではありません。神と交わるためには、私どもの実生活について何か神に話すことがなければなりません。

祈りとは、友だちに語るように、心を神に打ち明けることであります。これはなにも私どもがどんなものであるかを神に知らせる必要があるからではなく、私どもが神を受け入れるのに必要だからであります。祈りは、神を私どもにまで呼びおろすのではなく、私どもを神の許へひき上げるのであります。

イエスは、この世においでになったとき、弟子たちに祈る方法をお教えになり、毎日の必要を神に求め、どんな心配事もみな神に任せるようにお教えになりました。そして、彼らの祈りは必ず聞かれるという保証をお与えになりましたが、それはまた、私どもに対する保証であります。

イエスご自身も、この世に住んでいたもうた時よく祈りたまいました。救い主は御自ら、私どもと同じように、欠乏と弱さを覚えたもうて、義務と試練に耐え得る新しい力を天父より受けるために、熱心に祈り求める者となりたまいました。かれは、すべてのことにおいて私どもの模範であります。かれは、弱き私どもの兄弟となり「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」ました。しかし、罪なき方でありましたので、そのご性格が悪を退けたのでした。かれは罪の世にあって、激しい心の戦いと苦悩に耐えたまいました。かれの人間性は祈りを必要としまた特権としました。イエスは、父なる神と交わって慰めと喜びをお受けになりました。もし人類の救い主である神の子でさえ、祈りの必要をお感じになったのであるならば弱い罪深い人間には、どれほど熱心な、絶えざる祈りがなければならないことでしょう。

祈りの特権

私どもの天の父は、あふれるばかり祝福を私どもに与えたいと待っておいでになります。限りなき愛の泉のほとりで思う存分飲むことは、私どもの特権であります。それなのに私どもが少ししか祈らないのは、なんと不思議なことでありましょう。神は、その子らのどんな卑しい者であっても、心からの祈りにはいつでも耳を傾けようとしておいでになります。それにもかかわらず、私どもの方で私どもの要求をなかなか神に告げようとしない有様であります。神は、限りない愛をもって人類をみ心にかけ、いつでも私どもが求めたり思ったりする以上に与えようとしておいでになるのに、誘惑にさらされている哀れな力なき人間が格別祈ることにも努めず、信仰うすき様をみて天使たちはいったいどう思うことでしょう。天使は神のみ前にひざまずき、神のみそばにはべることを好み、神と交わることをこの上ない喜びとしています。それなのに、神のほか与えることのできない助けを最も必要としている地上の子らが、聖霊の光も神の臨在も仰がず、満足して日を送っているように思われるのであります。

悪魔は、祈りをおろそかにする者を暗黒に閉ざし、誘惑の言葉をささやいて罪へおびき入れます。それというのも、ただ私どもが、神の定めたもうた祈りの特権を用いないからであります。祈りは、全能の神の無限の資財が蓄えられてある天の倉を開く信仰の手に握られた鍵であります。それにもかかわらず、神の子らは、なぜ祈りをおろそかにするのでしょう。つねに祈り、忠実に見張っていなければ、私どもは次第に不注意になって、正しい道からそれる危険があります。敵は恵みのみ座への道を遮って、私どもが熱心な祈祷と信仰によって、誘惑に耐え得る恵みと力を受けることができないように絶えず働いています。

神が私どもの祈りを聞き、それに答えたもうには一定の条件があります。まず第１に、私どもは、神の助けが必要なことを感じなければなりません。神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」(イザヤ　４４：３)と約束しておいでになります。飢えかわくごとくに義を慕い、神を慕う者は必ず満たされるのであります。聖霊の感化を受け入れることができるように心を開かなければ、神の祝福を受け入れることはできません。

私どもが大いに必要としていることそれ自体が、動かすべからざる理由であり、私どものために最も雄弁に語ってくれます。けれども私どもは､こうした必要を満たし得るものとして神を求めなければなりません。かれは｢求めよ、そうすれば、与えられるであろう｣(マタイ ７：７)と仰せになります。また｢ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか｣(ローマ ８：３２)とも言われています。

もし、心に不義のあることを知り、罪と知りながらそれに執着しているならば、主は、私どもの祈りに耳を傾けたまいません。けれども、心の砕けた悔い改めた者の祈りは、必ず聞かれるのであります。心に覚えのある悪を全て正したときに、神は私どもの祈りを聞いてくださると信じることができます。私ども自身のどんな行為も、神の恵みを受けるにはなんの価値もありません。私どもを救うのはイエスの功績であって、私どもを清めるのもイエスの血であります。しかし受け入れられるには、私どももしなければならないことがあります。

力ある祈りのもう１つの要素は信仰であります。｢神に来たる者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。｣（ヘブル １１：６)。イエスも｢なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう｣(マルコ １１：２４）と弟子たちに仰せになりました。私どもは、み言葉をこの通り受け入れているでしょうか。

この保証は広大無辺でありますが、誠実な神のみ約束であります。私どもが祈ったときに求めた通りのものが与えられなかったとしても、主は私どもの祈りを聞き、これに答えたもうことを信じなければなりません。私どもは間違いが多く、先を見ることができませんので自分の祝福にもならないことを願うことがよくあります。けれども天の父は、愛のうちにその祈りに答え､私どものため最も良いものをお与えになります。それは、もし私どもが天よりの光に目が開かれ、全てのもののありのままの姿をながめることができたならば、私ども自身も必ず求めるものであります。私どもの祈りが聞かれないように見える時も、み約束にかたく頼らねばなりません。

なぜならば、祈りが答えられる時が必ずきて、私どもが最も必要とする祝福を受けることができるからであります。けれども、祈りはいつも私どもが望むままに答えられ、または、望んでいるそのものが必ず与えられると考えるのは、独断もはなはだしいことであります。知恵に満ちたもう神は、決して誤りたもうことなく、また、正しく歩む者に良きものを拒みたもうこともありません。ですから、たとえ祈りがすぐ答えられなくても、恐れず神に頼り「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ　７：７）という神のかたいみ約束に頼らなければなりません。

疑いや恐れに支配され、はっきりわからないことをみな解決した上で信仰を持とうとするならば、私どもはますます迷いの深みに陥るばかりであります。けれども、もし私どもがありのままの姿で、自分の力なさ頼りなさを感じて神の許にゆき、限りない知恵を持ちたもう神に謙遜に信頼をもって私どもの必要を告げるならば、万物をみそなわし、み旨とみ言葉をもって全てを支配しておいでになる神は、私どもの叫びに耳を傾け、心に光を照らしたまいます。真心からの祈りによって、私どもは限りなき神のみ心に触れるのであります。その時、あがない主は愛と憐れみに満ちて私どもをながめておいでになるという特別な証拠が与えられなくても、それは事実であります。またかれのみ手の接触を実際には感じなくても、愛と憐れみに満ちたやさしいみ手は、私どもの上に置かれているのであります。

神の憐れみと祝福を求める時は、私どもの心のうちに愛とゆるしの精神を持っていなければなりません。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」（マタイ　６：１２）と祈りながら、他人を許さない気持ちを持っていられるでしょうか。もし、自分の祈りが聞かれるように期待するならば、自分が許されたいと望むような態度と程度で、同じように人を許さなければなりません。

忍耐して祈ることは聞かれるもう１つの条件であります。信仰と経験に成長しようと望むならば私どもは常に祈らねばなりません。私どもは「常に祈りなさい」（ローマ　１２：１２）。「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続け」(コロサイ　４：２)なければなりません。

ペテロは信者に「心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(Ⅰペテロ　４：７)と勧めています。パウロは、「ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ　４：６)と教えています。また、ユダは「しかし愛する者たちよ。あなたがたは、最も神聖な信仰の上に自らを築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛の中に自らを保ち」(ユダ　２０，２１)と言っています。絶えざる祈りとは魂がつねに神と一致していることであって、神のいのちが私どものいのちに流れ込み、私どもの生活から純潔と聖潔とが神に帰ることであります。

祈りは努めてしなければなりません。何物にも邪魔されてはなりません。イエスとあなたの魂との交わりを常に保つことができるよう全力を尽さねばなりません。そして祈りがささげられるところへは、努めて機会あるごとに行かねばなりません。神と本当に交わりたいと求める人は、祈祷会に出席し、自分の義務を忠実に尽し、できる限りの利益を得ようと思って熱心であります。彼らは、天からの光を受けるところへはできるだけ機会をつくっていきます。

また、家族とともに祈らねばなりません。わけても、密室の祈りをおろそかにしてはなりません。これは、魂のいのちであるからであります。祈りをおろそかにしていながら、魂の健全を願うことはできません。家族の祈り、また、公の祈りだけでは不十分であります。人無きところに退いて、心を探りたもう神のみ前に心をすっかり開かねばなりません。密室の祈りは、祈りを聞きたもう神にのみ聞かれるべきで、好奇心にかられて人が聞いたりすべきものではありません。密室の祈りでは、心は周囲の影響を受けたり、また、興奮したりすることもありません。静かにしかも熱心に、神に近づこうとします。その時かくれたるに見たまい、心からの祈りに耳を傾けたもう神より、うるわしく、永久的な感化が感じられるのであります。穏やかでしかも単純な信仰によって、魂は神との交わりを保ち、神から光を受けて、悪魔との戦いに立ち得るために心は強められ支えられるのであります。神は、私どもの力の櫓であります。

密室で祈りましょう。毎日の仕事をする時にも、しばしば心を神に向けなければなりません。エノクはこのように神とともに歩んだのであります。黙祷は、恵みのみ座の前に尊いかおりのように上っていきます。こうして、神に心を委ねた人に、悪魔は勝つことはできないのであります。

神に祈りを捧げるのに、不適当な時とか場所とかはありません。熱心な祈りの精神をもって心を天に向けるのに妨げとなるものは何もありません。雑踏した路上でも、商取引の最中でも、ちょうどネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを告げた時のように、神に願いを捧げて導きを請うことができます。祈祷の密室はどこにでもあります。私どもは、絶えず心の戸を開いて、イエスに天来の客として心のうちに住みたもうよう招待しなければなりません。

たとえ私どもは、汚れた腐敗した空気に包まれていても、その毒気を吸う必要はなく、天の清い空気の中に生きることができます。真剣に祈って心を神の前に高め、不潔、不正な思いが入らぬようあらゆる戸を閉じることができます。神の助けと祝福を受けようと心を開いている者は、この世の人よりは清い雰囲気の中を歩き、天と絶えざる交わりを続けることができます。

私どもはイエスをもっとはっきりながめ、永遠なるものの価値をもっと十分に知らねばなりません。神の子らの心は、清い美しさに満たされなければなりません。そして、これが成就するために、私どもは天の事柄をあらわしていただくよう神に求めなければなりません。

神が天の雰囲気の一息でも呼吸させて下さるよう、心を世より離して天へ向けましょう。もし、私どもが神のそば近くにいれば、どんな試みが不意に襲ってきても、ちょうど花が太陽の方を自然に向いているように私どもの心も神に向くようになります。

どんな望み、喜び、悲しみ、煩い、恐れもみな神の前におきましょう。何を持ってきても重すぎたり、神を疲れさせたりすることはありません。

頭の髪の毛でさえ数えたもう神は、子らの必要に無関心ではおいでになりません。「主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ　５：１１)とあります。愛に満ちた神のみ心は、私どもが悲しみを口にしてさえ心をいためたまいます。心を煩わすことはなんでも神に申し上げましょう。神は諸世界を支え、全宇宙の全てを支配したもうのですから、神にとって大き過ぎて支えきれぬというものはないのであります。私どもの平和に関わることであったならばどんなことでも、小さすぎてお気づきにならないということはありません。私どものどんなに暗い経験も、暗すぎてお読みになれないということはありません。またどんなに難問題でも、神には解釈できないということはありません。神の子らのいと小さき者にふりかかる災いも、心を悩ます不安も喜びの声も、くちびるからほとばしる真剣な祈りも、天の父はことごとく注意し、深い関心を払いたもうのであります。「主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇　１４７：３)。神と各々の魂との関係は、あたかも神がただそのひとりのために愛するみ子を与えたもうたかのごとくに、はっきりとした完全なものであります。

イエスは「あなたがたは、わたしの名によって求めるであろう。わたしは、あなたがたのために父に願ってあげようとは言うまい。父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである」(ヨハネ　１６：２６，２７)。「わたしがあなたがたを選んだのである‥‥あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」(ヨハネ　１５：１６)と仰せになりましたが、イエスの名によって祈ることは、ただ祈りのあとにイエスのみ名を唱えるということではなく、イエスの心と精神をもって祈り、それとともにイエスのみ約束を信じ、その恵みに頼りかれのみわざにいそしむことであります。

神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世から逃れて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群衆の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます。

人が社会生活から離れてクリスチャンとしての義務と十字架を負うことを避け、自分たちのために熱心に働きたもうた主のため働くことをやめるとき、祈る主題を失ってしまい、神を拝する刺激も共に失ってしまいます。彼らの祈りは個人的になり、利己的なものになります。人類の必要やキリストのみ国の建設のために祈ることも、また働く力を求めることもできなくなります。

神に奉仕するにあたって、互いに力づけ励ますために、互いに交わる特権を軽視すれば必ず損失を招きます。神のみ言葉の真理はあざやかさを失い、その重要性を悟らなくなってきます。そして、私どもの心は、その清めの力に照らされることも、覚醒されることもなく、霊的に衰えてしまいます。クリスチャンとしての交わりのうちにも、お互いの同情がなければ大きな損失をします。自分ひとりで閉じこもっている者は、神が計画したもうその人の位置を満たしていないのであります。私どもの社交性を適当に涵養すると、他人にも同情できるようになり、神に奉仕する上においても発達と力が与えられるようになります。

もしクリスチャンが共に交わって、互いに神の愛と尊い贖罪の真理について語り合うならば自分の心がうるおされ、お互いの心がうるおされるのであります。私どもは日ごとに、天の父についてもっと学び、神の恵みを新たに受けるのであります。そうすると、神の愛について語りたいと思うようになり、人に話せば自分の心が暖められれ励まされるのであります。もし私どもがもっとイエスのことを話し、より少なく自分のことを考えるならば、いっそうかれの臨在を仰ぐことができるのであります。

神は私どもを常に守っていたまいますから、いつも神のことのみを考えたいと思えば、いつも心に神を宿し喜んで神について語り神を賛美しなければなりません。私どもがこの世的なことを話すのは、それに興味をもっているからであります。友のことを話すのは、その友を愛し、喜びも悲しみも共にしているからであります。けれども私どもは、この地上の友を愛するより以上に神を愛する大きな理由があります。ですから、何よりもまず神のことを思い神のあわれみ深いこと、また、神のみ力について語ることは、全く自然なことでなければなりません。

神が私どもにお与えになった賜物があまり豊かなため、私どもの思いや愛情が全部それに奪われ、神にお返しするものが何もないようではいけません。むしろ、これらの賜物は、常に私どもに神のことを思い出させ、愛と感謝の絆で恵み深き神に結びつけるためのものであります。私どもは、とかくこの世のことに心を奪われがちでありますが、天の開かれた聖所の扉を見上げ、「彼によって神に来た人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル　７：２５)。キリストのみ顔に神の栄光が輝いているのをながめましょう。

私どもは、もっと「主のいつくしみに、人の子らになされたくすしきみわざとのために」(詩篇　１０７：８)神をほめたたえねばなりません。私どもの祈りは、ただ求めること、与えられることだけであってはなりません。また自分の欠乏ばかり考えていて、受けた恵みを忘れることがないようにしましょう。私どもは祈ることが本当に少ない上に、また、感謝の念に乏しい者であります。絶えず神のあわれみを受けていながら、なんと感謝を言い表すことが少なく、神が私どものためになしたもうたことを賛美することのなんと少ない者でしょう。

その昔、イスラエル人が礼拝のため集まったとき、主は次のようにお命じになりました。「そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しまなければならない。これはあなたの神、主の恵みによって獲るものだからである」(申命記　１２：７)と。神のみ栄えのためになされることは、賛美と感謝の歌をもって喜んでなされるべきであって、悲しい気持や憂鬱な気持でなされてはなりません。

私どもの神は、優しいあわれみある父であります。神に仕えることは、悲しい心重いこととみなされてはなりません。神を礼拝し、みわざに携わることは喜びでなければなりません。かくも大いなる救いをお備えになった神は、その子らが、神をかたくなな、無情な監督ででもあるかのようにみなし、そのようにふるまうことをお好みになりません。神は、私どもの最も良き友であります。

そして、私どもが神を礼拝する時には、共にいて祝福し、慰め、その心を喜びと愛で満たそうとしてくださいます。主は、神の子らが神に仕えて慰めを与えられ、みわざに困難よりもむしろ喜びを感じるように望みたまいます。また神は、礼拝に集まる人々が、神の尊い守護と愛を深く感じて帰り、日常のどんな仕事も喜んでなすことができ、神の恵みによって、全てのことを正直に忠実になすことができるようにと望んでおいでになります。

私どもは、十字架のもとに集まらなければなりません。キリストと、かれの十字架に釘づけられたもうたこととが私どもの瞑想と会話、また、何よりも喜ばしい感激にあふれた主題でなければなりません。神から受けた全ての恵みを心にとめてその大いなる愛を悟ったならば、私どものために十字架に釘づけられたもうたみ手に、喜んですべてをお任せしなければなりません。

私どもの魂は、賛美の歌に乗って天に近づきます。神は天の宮廷で、歌と音楽をもって礼拝を受けておいでになります。ですから、私どもも感謝を捧げるならば、天軍の礼拝に近づくことができるのであります。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」(詩篇　５０：２３)とあります。私どもも「感謝と歌の声」(イザヤ　５１：３)をもって喜びのうちにもうやうやしく創造主のみ前にいきましょう。

疑いをいかにすべきか

多くの人、ことにまだ信仰に入って日の浅い人々は、心に疑惑をいだいて悩むことがあります。聖書の中には説明のできないこと、また了解に苦しむことが多くありますので、悪魔はそれらを用いて、聖書は神の啓示であるとの信仰を揺り動かそうとします。彼らは「どうすれば私は正しい道を知ることができましょう。もし聖書が本当に神のみ言葉であるとすれば、私は、どうすればこのような疑いと難問題から救われることができましょうか」と尋ねます。

神は、私どもに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えたもうた上でなければ、信ずるようには求めたまいません。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、私どもの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されています。けれども、神は、疑う余地を全然取り除きたもうたのではありません。私どもの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければなりません。疑おうと思う者には疑うことができますが本当に真理を知りたいと求めている人は、信仰の基礎となる十分の証拠を発見することができます。

限りある心をもって、限りなき神のご性質やみわざを十分に悟ることは不可能であります。どんなに鋭い知能の持ち主でも、どんなに教育をうけた人にとっても、聖なる神は神秘に包まれてよくわからないのであります。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ　１１：７，８)。

使徒パウロは「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ　１１：３３）と言っています。しかしたとえ、「雲と暗やみとはそのまわりに」あっても「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇　９７：２）であります。

こうして私どもは神が私どもを扱いたもう方法、また何故そうしたもうかというみ旨を理解して、無限のみ力に限りなき愛とあわれみが結びついているのを認めることができます。そして、私どもの益であるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者のみ手と愛のみ心に一任しなければなりません。

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘があります。罪がこの世に入ったこと、キリストの受肉、新生、復活、その他、聖書に記されている多くの問題は、きわめて深い神秘でありますから、とうてい人間の頭脳では説明することも、十分に理解することもできないのであります。けれども神の摂理の奥義を了解できないからといって、神のみ言葉を疑うなんの理由もありません。自然界においても私どものわからない不思議なことがいつも身のまわりに起っています。最下等の生物でさえ、どんなに賢明な哲学者でも説明に苦しむ問題を投げかけています。どちらを向いても、私どもの理解し得ない驚異があるのですから、霊界においても、私どもの測り知ることができない不思議があるからといって驚くことはないではありませんか。問題はただ、人の知力が弱く見解が狭いことにあるのであります。神は聖書の中に聖書が神よりのものである証拠を十分与えておいでになるのですから、神の摂理をことごとく了解できないからといってみ言葉を疑ってはなりません。

使徒ペテロは、聖書の中には「わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ＩＩペテロ　３：１６)と言っています。聖書の難解なことが懐疑論者の聖書の攻撃の論題となっていますが、このことがかえって聖書が神の霊感によるものであるという強い証拠であります。もし聖書の神についての記録がわかり易い事ばかりで、神の偉大さと崇高さが限りある心で了解できるとするならば、聖書は間違いなく神よりのものであるという証拠はなくなるのであります。

聖書に示されている主題が大きく神秘的であるということが、神のみ言葉であるとの信仰を起こすべきであります。聖書は単純に真理を説明し、どんな人の心の必要と欲求にも答えることができるので、最高の教養ある人を驚かせてひきつけると同時に、なんの教養もない卑しい者にも、救いの道を知らせることができるのであります。とはいえ、この単純に述べられた真理は、実に高尚深遠な問題をとらえ、人間の理解力のとうてい及ばないものでありますけれども、神がかく述べたもうたという理由のもとにのみ、それをそのまま受け入れることができるのであります。こうして贖罪が明らかに示されていますから、誰でも神に向かって悔い改め、主イエス・キリストを信じ、神の定めたもうた方法に従って、救われるために進む道を知ることができるのであります。しかし、このようにやさしく理解できる真理のかげに神秘がひそみ、見えざる神の栄光を物語っています。この神秘は、研究する者の心を圧倒するのでありますが、真面目に真理を求めている人には敬虔と信仰の念を起こさせます。そして、聖書を研究すればするほど、それが生ける神のみ言葉であるという確信が深められ、人間の理性は偉大なる神の啓示の前にはひれ伏すほかないのであります。

聖書の偉大な真理を十分に理解することができないと認めることは、限りある人知は、無限を悟るに不十分であるということを認めるにすぎません。つまり、人間は、限られた知識をもっては全能者の目的を悟ることはできないというのであります。

懐疑論者や無神論者は、全ての神秘を測り知ることができないという理由のもとに、神のみ言葉を否定しています。そして聖書を信じると公言する者でさえ、こうした危険に陥らないとも限りません。使徒は「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」(ヘブル３：１２)と申しました。聖書の教えを詳しく調べ、聖書に示されているかぎり「神の深みまで」(Ⅰコリント　２：１０)探ることは正しいことでありますが、「隠れた事はわれわれの神、主に属するもの」であり「表わされたことは長くわれわれ‥‥に属」(申命記　２９：２９)するものであります。けれども、悪魔は人の研究心を曲げようと働いています。

聖書の真理を研究するにあたって、一種の誇が起こり、聖書の全ての点を自分の満足できるまで説明できないと短気をおこし失望する人があります。そして、霊感によるみ言葉を理解することができないと自ら認めることは、あまりにも屈辱であると思います。彼らは、神が適当なときにその真理を示したもうまで忍耐して待とうとしません。また、なんの援助もなく、人間の知恵だけで十分聖書を理解することができると考え、それができないとなると実際に聖書の権威を否定してしまいます。もっとも、世に聖書の教理として一般に信じられているものの中には、全然聖書にそのような根拠を持たないばかりか、かえって神の示したもうた主旨と正反対のものも少なくありません。こうした事が、多くの人たちに疑いを起させ困らせているのであります。しかし、これは神のみ言葉のせいではなくみ言葉を曲解した人間のせいであります。

もし、造られたものが、神とそのみわざをことごとく理解することができて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達もやんでしまいます。そうなれば、神はもはや至上者でなくなり、知識と学識に到達した人類には、進歩の余地は無くなるでしょう。しかし、そうでないことを神に感謝せねばなりません。神は無限であります。神に「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ　２：３)とあります。そして、人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはないのであります。

神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいたまいますが、この知識を得る道はただ１つしかありません。み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照らされてはじめて、み言葉を理解することができます。「神の思いも、神のみたま以外には知るものはない」「みたまはすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(Ｉコリント　２：１１，１０)。また、救い主は弟子たちに「真理のみたまが来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう‥‥わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」(ヨハネ　１６：１３，１４)とお約束になりました。

神は、人間が理性の力を働かせるように望みたまいます。聖書の研究は、外のどんな研究にもまさって知力を強め高尚にします。しかし、理性を偶像化しないように気をつけねばなりません。これは弱い人間にありがちなことであります。聖書が難しくて理解できないとかごく明白な真理でさえも理解できないなどということがないようにするには、どうしても、幼子のような単純な信仰をもち、教えられる気持で聖霊の助けを求めねばなりません。神の力と知恵を悟り、神の偉大さはとうてい私どもには理解できないことを知れば、それは私どもを謙遜にし、ただ聖書を開く時でさえ神の面前に出るかのような、うやうやしい気持にさせるのであります。聖書を学ぶにあたっては、そこに私どもの理性以上の権威を認め、心も知能も「わたしにある」と仰せたもう偉大なる神のみ前にひざまずかねばなりません。

一見、聖書には、難しく、不明瞭なことが多いのでありますが、神は、それを了解しようと求める人々には、わかりやすく単純にして下さいます。けれども、聖霊の導きがなければ、聖書の意味を曲解したり、誤解したりする危険があります。聖書を読んでもなんの益も受けず、かえってそれによって大きな害をこうむっている人々もあります。敬虔な心と祈りがなくて神のみ言葉を開いたり、思いと愛情が神に向いていなかったり、または、神のみ心に調和しないでいると、心は疑惑の雲でおおわれ聖書研究をしていながら、懐疑心が強められるのであります。敵が思想を支配して正しくない解釈を暗示します。人が言葉にも行いにも神と一致しようと求めていなければ、いくら教育ある人であっても聖書の解釈を誤りやすくなりますから、彼らの解釈をあてにしては危険であります。矛盾を見いだそうと思って聖書を探る人は、霊の目がまだ開かれていない人であります。偏見をもって見るので、実はわかりやすく単純な事柄でもなにかと理屈を言って疑い信じようとしないのであります。

いろいろの仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります。神のみ言葉の教えと訓戒は高慢な罪を愛する人々には歓迎されません。

神の要求に従うことを喜ばない者は、み言葉の権威をすぐ疑うのであります。真理に到達するには真理を知りたいという真面目な望みをもって、それに喜んで従わなければなりません。こうした精神で聖書を研究する人は聖書が神のみ言葉であるという証拠を多く見いだし、その真理を理解し会得して救いに至るのであります。

キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ７：１７)と仰せになりました。わからないことを疑ったり、理屈を並べたりしないで、すでに与えられている光に従うならば、更に大きな光が与えられるのであります。はっきりと理解できた義務を全てキリストの恵みによって実行すれば、今では疑いを持っていることも理解できて、実行することができるようになります。

最高の教育を受けた者にも、最も無学な者にも、はっきり示される証拠は経験という確証であります。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることを私ども自らが試してみるようにと仰せになりました。神は私どもに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇　３４：８)とお命じになりました。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければなりません。神は「求めなさい、そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ　１６：２４)と仰せになるのでありますから、この約束を間違いなく果たして下さいます。神の約束は今まで違ったこともなければ、これからも違う事はありません。そして私どもがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光に私どもの疑いも暗きも消え去ってしまうのであります。

使徒パウロは、神は「わたしたちをやみの力から救い出して、その愛するみ子の支配下に移してくださった」（コロサイ　１：１３）と申しました。そして死より生へ移った人々は誰でも「神がまことであることを、たしかに認めたのである」（ヨハネ　３：３３)とすることができるのであります。そして、その人はあかしして申します。

「私には助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えはみたされました。今では、聖書は私にとってイエス・キリストの啓示となりました。私がどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスは私にとっては天よりの救い主であるからであります。どうして私が聖書を信ずるかといえば、それは、聖書が私の魂にとって神のみ声であることがわかったからであります」と。私どもは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるという事をあかしすることができます。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのであります。

ペテロは、「わたしたちの主また救い主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」(Ⅱペテロ　３：１８)と申しました。神の民は、神の恵みのうちに成長するにつれて、神のみ言葉をますます明瞭に了解することができるようになります。そして、聖なる真理に新しい光と美を認めるのであります。これは各時代の教会史を通じて歴史が証明していますが、なお終末までこうして継続するのであります。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」(箴言　４：１８)。

私どもは、信仰によって将来をながめます。そして、人間の機能が神と結合し、魂のあらゆる能力が光の源と直接に触れ合うとき、神の約束したもうたように知能が伸びる事を信じます。その時、神のみ摂理のうちに私どもが悩んだ事はみな明らかにされ、わからなかった事も説明ができるようになります。そして、私どもの限りある心では、ただ混乱と矛盾ばかりであったところに、最も完全な美と調和を見る事でありましょう。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう‥‥しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」(Ⅰコリント　１３：１２)。

主にある喜び

神の子らはキリストの代表者として召されたものでありますから、主の恵みと憐れみを示さなければなりません。イエスが天の父の真の品性を私どもにあらわしたもうたように、私どももキリストの優しい憐れみ深い愛を知らない世の人にキリストを示さなければなりません。イエスは「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」「わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは‥‥あなたがわたしをつかわし‥‥になったことを、世が知るためであります」(ヨハネ　１７：１８，２３）と仰せになりました。使徒パウロは、イエスの弟子たちに向かって「あなたがたは自分自身が‥‥キリストの手紙で」あり「すべての人に知られ、かつ読まれている」（Ⅱコリント　３：３，２)と申しました。イエスは、神の子らの１人１人を手紙としてこの世に送りたまいました。もしキリストに従う者であれば、キリストはその人を手紙として、その住んでいる家族へ、村へ、町へお送りになるのであります。イエスは人の心に内住して、まだイエスを知らない人の心に話しかけたいと望んでおいでになります。おそらくその人々は、聖書を読まず聖書に書かれたことに耳を傾けたりしないでしょう。また、神のみわざを見ても、神の愛を悟らないかも知れません。けれども、もしイエスの真の代表者がいるならば、世の人々はその人を見て神の恵みを悟る事ができ、イエスを愛し、仕えるように導かれるのであります。

クリスチャンは、天国への道を照らす燈火として置かれているのでありますから、キリストから輝き出た光を世の人々に反映しなければなりません。クリスチャンの生活、また、性格は人々が見て、キリストを正しく知り、キリストに仕えることはどんなことであるかを正しく知ることができるに足るものでなければなりません。

もし私どもがキリストを代表する者であるならば、キリストに仕えることが実際にどんなに楽しいものであるかを人に示すことでありましょう。心が憂鬱と悲しみで満たされ、不平不満を言ったり、つぶやいたりしているクリスチャンは、神について、またクリスチャン生活について人々に誤解を起こさせます。そして、神は神の子らの幸福をお喜びにならないとでもいうような印象を人々に与え、天の父に対して偽りのあかしをたてているのであります。

悪魔は、神の子らが不信仰を起こし落胆するのを喜びます。また、私どもが神に信頼せず、神は、快く私どもを救ってくださる御方であることを疑うのを喜びます。また神は摂理のうちに私どもを害したもうというように考えさせ、神は憐れみと同情に欠けておいでになるように見せかけるのは悪魔の働きであります。彼は、神に関する真理を曲解し、神に関するまちがった思想を私どもの心に満たすのであります。私どもも、ともすれば、天の父に関する真理に堅く立つ代りに、悪魔の誤った言葉に惑わされ、神を信頼せずつぶやいて神を辱めるのであります。悪魔は絶えず信仰生活を憂鬱なものにしようと努めています。また骨が折れて困難なもののように見せかけます。そして、クリスチャンが自分の生活に対してこのような宗教観をいだくならば、その不信仰の結果、悪魔の偽りを支持した事になります。

人生行路をたどりながらも、自分の間違いや欠点や失望ばかりを考えて、悲しみと落胆に満たされている人がたくさんいます。私がヨーロッパに行っていたとき、ある姉妹がちょうどこのような有様で、たいへん失望し励ましの言葉を求めてきました。その手紙を読んだ夜の事ですが、私は、ある庭園を歩いている夢を見、その庭園の持ち主と思われる人に案内されていました。私は、道すがら花を摘み、そのたかいかおりを楽しんでいますと、そばを歩いていたこの姉妹は、道を遮っているつまらないいばらを見て、それを悲しみ嘆いていたのであります。この姉妹は、案内者に従って道を歩かないで、いばらやとげの中を歩いて「せっかくの美しい庭園も、このようないばらがあっては本当に残念な事です」と言うのでありました。すると、案内者は「いばらの事は気にしなさるな。ただ害を受けるばかりです。それより、ばらやゆりやなでしこを摘んではどうですか」と答えた。

あなたの経験のうちに、何か明るい事がなかったでしょうか。神のみたまを感じて、喜びで心がときめいた尊い瞬間はなかったでしょうか。今までの生涯の経験をふり返ってみるとき、何か楽しかったできごとはなかったでしょうか。神の約束は道ばたに一面に咲いているかおり高い花のようなものではないでしょうか。私どもはその美と甘いかおりを心から喜ぼうではありませんか。

いばらととげは、ただ傷つけ悲しませるばかりであります。いばらばかりを集めて、それを他の人にも与えるならば、それは神の恵みを自らあなどるばかりでなく、周囲の人々をいのちの道へ導くのを妨げる事になるのではないでしょうか。

過去の生涯の不愉快な思い出、罪や失望ばかりをかき集め、その事を語り、悲しんでついには失望してしまうことは決して賢明なことではありません。失望した魂は暗闇におおわれ、心から神の光を閉ざしてしまい、他の人々の行く手にも陰を投げかけます。

しかし、神が描いて下さった輝かしい光景を感謝いたしましょう。私どもは神の愛の確証を集めて、常にそれをながめるようにいたしましょう。すなわち、神のみ子が、悪魔の勢力より人を救うために、父のみくらを捨て、人性をもって神性をおおいたもうた事、また、私どもに代わって勝利を得、天を開き、栄光に輝く神のみくらを人にあらわしたもうた事、更に罪のため陥った滅びの淵より堕落した人類を救い出し、無限の神との交わりに入れたもうた事、そして人は、あがない主を信じて神の与えたもう試練に耐え忍ぶならば、キリストの義を着せられ、神のみくらにまで高められることなど、こうした事を私どもが瞑想するように神は望んでおいでになるのであります。

神の愛を疑い、神の約束に信頼しないならば、神をはずかしめ、聖霊を悲しませるのであります。例えば、母親が子供の幸福と慰めの為あらゆる努力を尽してきたにもかかわらず、子供らは、いっこうそのような事には気もとめず、不平ばかり言うならば母親はどう感じることでありましょう。

もし子供たちが母の愛を疑ったとしたならば、母親はどれほど悲しむことでありましょう。どんな親でも、子供からそのように扱われるならば、どういう気持がするでしょう。それと同様に、天の父も私どもにいのちを与えるためにひとり子を賜わったその愛を私どもが信じなかったならば、私どもを顧みたもうことができるでしょうか。使徒は「ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ ８：３２）と言っています。けれども、口で言わなくても、その行いで、「神は私にこう言っておられるのではない。多分、神は他の人々を愛したもうかもしれないが、私を愛したもうているのではない」と言っている人がたくさんあります。

こうしたことは全て、あなたの魂に害を及ぼします。というのは、疑いの言葉を出せば、それはみな悪魔の誘惑を招くことになるからであります。そして、ますます疑惑を深め、奉仕の天使を悲しませています。ですから、悪魔に試みられる場合には、ひと言も疑いや暗い言葉を言ってはなりません。もし悪魔のささやきに耳を傾けるならば、心は不信と反抗的な疑問で満たされることでありましょう。また、自分の感情を口に出し、疑いの言葉を語るならば、それは自分に帰ってくるばかりでなく、種子のように、他人の生涯にまかれて芽を出し、実を結ぶという訳で、あなたの言葉の影響を取り消す事はできなくなってしまいます。あなた自身は一時の誘惑に打ち勝ち、悪魔の罠から逃れることができるかも知れませんが、その言葉に感化された人々は、その不信からのがれることができないかも知れません。ですから、霊的の力といのちを与える事柄だけを話すということは本当に大切なことであります。

天使たちは、あなたが世の人々に天の神についてどんなあかしをするかを耳を傾けて聞いています。ですから、人と話すときには、今生きて父の前に執り成しをしていたもうキリストについて語りましょう。友の手を握るときも、くちびると心をもって神をほめたたえましょう。そうすれば友人の思いをイエスにひきつけることができます。

主にある喜び

誰でも、試練、耐えがたい悲しみ、抵抗しがたい誘惑を持っていないものはありません。自分の悩みを友に語るのでなく、何事も祈りによって神に訴えなければなりません。疑いや失望の言葉はひと言も言わないということにいたしましょう。希望と清い喜びに満ちた言葉を語ることによって、他の人を更に明るく強く生きるように導くことができます。

世の中には、勇敢な人々でもひどく試みにうちひしがれ、自我や悪の権力との戦いに気を失うばかりになっている人が多いのであります。戦いはいかに激しくとも、失望させず、勇気と希望に満ちた言葉で励まし、前進させなければなりません。こうしてキリストの光があなたから輝き出るのであります。「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者」（ローマ　１４：７）なしであります。私どもが気がつかないで及ぼす感化が人々を励まし強めることも、また失望させキリストと真理から退けることもできるのであります。

また、世には、キリストの生涯と品性を誤解している人が多く、キリストは、暖かさも明るさも持っておいでにならず、厳格、苛酷で、なんの喜びも味わいたまわなかったと思っています。そして、すべての宗教経験がこのような陰鬱な見解に色どられていることが多いのであります。

イエスは泣きたもうたが、微笑みたもうたことは１度もないということは、よく言われることであります。誠に、私どもの救い主は、人類のあらゆる悲しみを心を開いて受けたもうたのでありますから、悲しみの人であって、悩みを知りたもうていたに違いありません。イエスの生涯は、自己否定の生涯であって、悲痛の陰におおわれてはいましたが、イエスの意気はくじけていたのではありませんでした。み顔には、苦しみ不平の色はなく、いつも変わらぬ平和な落ち着いた表情が漂っていました。また、イエスのみ心は命の泉であって、かれの行きたもう所いずこにも、休息と平和、楽しみ、また、喜びをもたらしたもうたのであります。

私どもの救い主は、実に真面目で熱心でありましたが、決して憂鬱でもなければ、気難しくもありませんでした。

救い主にならう人々もまた、熱心に目的をもって励むようになり、個人的責任を深く感じるようになります。軽率な行為は無くなり、そうぞうしい楽しみや無躾な冗談は無くなります。しかし、イエスの宗教は川のような平和を与えるのであります。それは喜びの光を消したり、快活さを抑制したり、明るい笑顔をくもらせたりするものではありません。キリストは仕えられるためでなく、仕えるために来たりたもうたのであります。そして、ひとたびキリストの愛が心を支配するとき、私どもはかれの模範に従うことができるのであります。

もし、私どもが、他人の不親切や不正な行為を心に留めて忘れないでいるならば、キリストが私どもを愛したもうたように、その人々を愛することはできません。けれども、もしキリストの驚くべき愛と憐れみのことを考えているならば、その同じ精神が他の人へも流れ出て行くのであります。私どもは、どんなにお互いの欠点や不完全さが見えても、お互いに愛し尊敬しなければなりません。謙遜な心を養いおのれに頼ることをやめ、他人の欠点を優しく忍ぶようにならねばなりません。そうすれば、狭い利己心は根を絶ち、寛大な心を持つことができるようになります。

詩篇記者は「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇　３７：３)と申しました。「主に信頼して」であります。私どもは１日として重荷や心配、苦労のない日はありませんから、すぐそうした困難や試練を他人に話したくなります。いろいろの取越し苦労をしたり、恐れや心配を口に出したりするので、あたかも、全ての祈りを聞き、必要な時にはいつも助けたもう憐れみと愛に満ちた救い主がおいでにならないかのように人に思わせます。

また、ある人は常に恐れ、いたずらに取越し苦労をしています。彼らは毎日神の愛のしるしにかこまれ、神の摂理のうちに恵まれていながら祝福を見過ごしにしています。その人々は、何か不愉快なことが起こりはしないかとそのことばかり考えています。また実際に当面する困難は、ほんの小さいものであっても、そのために目がくらんで感謝すべき多くのことを見ることができません。ですから、困難に会えば、唯一の助けの源である神に行くかわりに、かえって不安と不満の念を起して神より離れてしまいます。

このように不信仰でいていいでしょうか。どうして感謝と信頼の念がないのでしょうか。イエスは私どもの友であります。全天は私どもの幸福を願っています。日常生活の困難、または、労苦に悩まされることがあっても、失望してはなりません。もし、そうしたことを気にしていれば悩みの種はいつまでも尽きないのであります。心配してはなりません。それはただ、私どもを悩まし疲れさせるばかりで、試練に耐えるなんの助けにもなりません。

業務上にいろいろの困難が起り、前途はますます暗くなり、損失が目前に迫ることもありましょう。しかし失望してはなりません。心配をみな神に任せて、平静、快活にしていましょう。賢く物事を処理できる知恵を神に祈るとき、損失、失敗を免れることができるのであります。良い結果をもたらすように、全力を尽して自分の分を果さなければなりません。イエスは助けを約束していたもうからといって、何も努力しなくて良いというのではありません。私どもの助け主により頼んで最善を尽したならば、結果はなんでも喜んで受け入れましょう。

神の民が心配事をいだいて心重くしているのは神のみ心ではありません。主は私どもを欺きたまいません。私どもに「何も恐れることはない。前途にはなんの危険もない」と仰せにはなりません。試練や危険があることをよく知りたもうて、はっきりとそのように言ってくださいます。民を罪と悪の世から取り去ろうとはなさらず、間違いの無い逃れの場所を示していたもうのであります。イエスは、弟子たちのために「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります」また「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ　１７：１５，１６：３３)とお祈りになりました。

キリストは山上の垂訓の中で、神に頼ることの必要について、尊い教えをたれたまいました。これは各時代を通じての神の子らを励ますためのものでありまして、今日においても、教えと慰めに満ちています。救い主は、空の鳥が楽しく神をたたえ少しも心配せず、「まくことも、刈ることもせず」にいるのを見よと仰せになりました。それでも、大いなる父は、小鳥の必要を満たしたまいます。

「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ６：２６）と救い主は問いたもうたのであります。人にも獣にも豊かに与えたもう神は、全ての造られたものの必要を満たしたもうのであります。空の鳥でさえ、神の御目よりもれることはありません。神は食物をくちばしの中に落したまいませんが、必要を満たしたまいます。小鳥は、神がちらしたもうた穀類を集めなければなりません。また、巣を作る材料を用意し、ひなを養わなければなりません。小鳥はそれでも、歌いながら働きに出て行きます。というのも「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」からであります。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」であります。理性を備え霊をもって拝みをなす人間は、空の鳥よりはるかに優れているのではないでしょうか。私どもを造りたもうた神、命を支えたもう神、また、私どもをおのがかたちにかたどりたもうた神は、ただ、私どもが神に信頼していさえすれば、私どもの必要を満たして下さるのではないでしょうか。

キリストは、野の花が一面に美しく、天の父より与えられた美を競っているのを指さして、これは神の人に対する愛の表現であると仰せになり、また、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」（マタイ６：２８）と弟子たちに仰せたまいました。ソロモンの栄耀栄華でさえ、自然の花のこうした美しさにはとうてい及ばなかったのであります。芸術的技巧をこらして生み出したどんな華麗な装いも、神の造りたもうた花の自然の華麗さには比べることはできません。イエスは、「きょうは生（は）えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ　６：３０）と仰せになります。もし天の芸術家である神が、１日で枯れてしまう草花にさえ、このように繊細ないろいろの色彩を与えたもうとすれば、神ご自身にかたどって造りたもうた者に、どれほど心をとめておいでになることでしょう。キリストの教えはいたずらな思い煩い、悩みと疑いをいだく信仰のない者への譴責であります。

主にある喜び

主は、神の子らがみな幸福、平和、従順であるように望んでおいでになります。イエスは、「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ　１４：２７，１５：１１)と仰せたまいました。

利己的な動機から義務の道をはずれて求めた幸福は、均衡がとれていないため変りやすく、一時的のものであります。それが過ぎ去ると、心は寂しさと悲しみで満たされます。けれども神に仕えることには喜びと満足があります。クリスチャンは、疑わしい道を歩んだり悲しみ失望の中に捨てられることはありません。たとえ、この世に楽しみがなくても、なお来たるべき世を待ち望んで喜ぶことができます。

しかし、この世にあっても、クリスチャンはキリストと交わる喜びがあります。また、キリストの愛の光をもち、共にいましたもうかれより絶えざる慰めを得ることができます。人生の歩みの１歩１歩が私どもをイエスに近づけ、イエスの愛をより深く経験し、１歩だけ祝福された平和な家庭に近づけるのであります。ですから、私どもの確信を投げ棄てないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル上　７：１２)とありますが、神は終りまで私どもを助けたもうのであります。主が私どもを慰め、滅ぼす者の手より私どもを救いたもうた際の記念の塔をながめましょう。神は、涙をぬぐい痛みを和らげ、心労を除き恐怖を取り去り、必要を満たし祝福をさずけたもうたのでありますが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、私どもの前途に横たわる残りの旅路を進まねばなりません。

私どもは、来たるべき争闘においては新しい困難が起ることを避けることができませんが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」(申命記　３３：２５)と言うことができます。神は、私どもの力に耐えられない試練に会わせたもうことはありません。

どんなことが起っても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままに私どもの仕事を始めましょう。

やがて、天の門が神の子らのために開かれ、栄光の王のみ口より「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタイ　２５：３４)という祝福の言葉がたえなる音楽のごとくに響いてきます。

こうして、贖われた者は、イエスが彼らのため備えたもうた住居に迎えられるのであります。そこで彼らが交わる人々は、地上の悪人、偽りを言う者、偶像を拝む者、汚れた者、不信仰な者ではなく、悪魔に打ち勝ち、神の恵みによって完全な品性を形づくった人々であります。この地上で彼らを苦しめたあらゆる罪の傾向、あらゆる不完全さは、みな、キリストの血によって除かれ、太陽の輝きよりはるかに優れたキリストの栄光の美と輝きが、彼らに与えられるのであります。そして、彼らを通して輝く人格の美、キリストの品性の完全さは、とうていこの世の外見の麗しさの及ぶものではありません。彼らは神の大いなる白きみくらの前に罪なき者とせられ、天使たちの尊厳と特権にあずかるのであります。

こうした栄えある嗣業を思うとき、人は「どんな代価を払って、その命を買いもどす」(マタイ　１６：２６)ことができるでしょうか。人は、たとえ貧しくても、この世の与えることのできない富と尊厳とを自分のうちに持っているのであります。罪より贖われ、清められ、神へのご用にその尊い力の全てを捧げた魂はこの上もなく尊いものであります。天ではただ１人の救われた者のためにも、神と、天使は大きな喜びを感じます。そして、その喜びは、清い凱歌となって表現されるのであります。

福　音　社

目 次

神の愛　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

キリストの必要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

悔い改め　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

告 白　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

献 身　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

信 仰　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

弟子としての証拠　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

成 長　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

人生と活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

神についての知識　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

祈りの特権　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

疑いをいかにすべきか　・・・。・・・・・・・・・・・・・79

主にあるよろこび　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86